

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 109 Dec.

特集

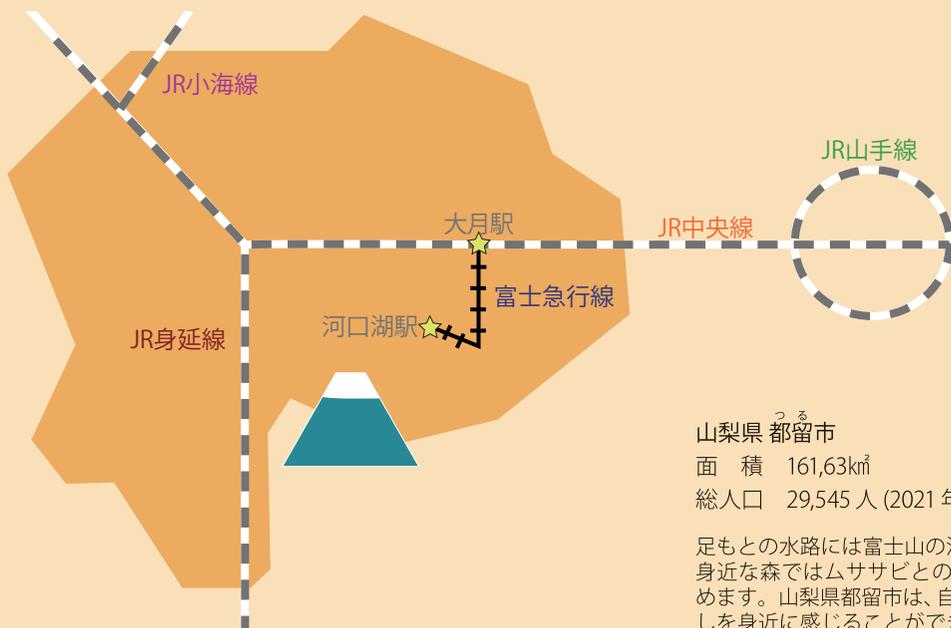
【駅間】



富士吉田市、^{ね かも}子の神通りの提灯。かつての繁華街跡が今もなお残っています



- | | |
|---------------|----------------------|
| 31 つるを味わう | 44 思い描くままに |
| 32 日々をつくる | 46 センサーカメラが写したどうぶつたち |
| 34 燃える山をさがして | 47 ムササビ観察日記 |
| 36 野菜以上のおくりもの | 48 西願寺と七変化もみじ |
| 38 都留ハイキング日記 | 54 電車に乗る楽しみ |
| 40 かげはもたらす | 56 都留の風景写真集 |
| 42 フィールド暦 | |



FIELD・NOTE



特集 / 【駅間】

- 06 フィールドをつくる
- 09 ブクと火祭り
- 12 ひと駅まえでおりてみる
- 15 路地裏をたずねて
- 18 引き出しのなかの傘
- 21 くぐったさきに
- 24 クエストは つづく！
- 27 まどろむ空間



表紙写真

都留市かわもの川茂から早朝の富士山を見ると、山の稜線が海の波のようでした。浮世絵の世界にいる錯覚を抱きます。快晴の一日に寒さを忘れて見入ってしまいました。
(2021年12月13日)

駅

富士急ハイランド駅

<トーマスランド>

FUJI-Q HIGHLAND STATION

<THOMAS LAND>

河口湖駅

<富士河口湖温泉郷>

東桂駅

Higashikatsura

えきかん【駅間】(名) ある駅から次の駅までのあいだを指す。『フィールド・ノート』編集部による造語。

富士急行線は富士河口湖町と大月市を
むすぶ鉄道です。

私たちはふだん、アルバイト先や地元など、
目的地へ行くための手段として
何気なく利用しています。

そうして富士急行線に揺られているあいだ、
私たちは「駅間」にあるものを
見逃していることに気がつきました。

三つ峠駅

mitsutouge

ことぶき
寿駅

Kotobuki

よしいけおんせんまえ
葭池温泉前駅

Yoshiike-onsenmae

下吉田駅

(新倉山浅間公園)
SHIMOYOSHIDA STATION (Chureito Pagoda)

月江寺駅
Gekkouji

富士山

車窓からの景色を眺めるだけでは、
どのような暮らしやお店があるのかを
確かめることはできません。

そこで、じっさいに富士急行線の「駅間」を
歩いてみることにします。

成り行きにまかせて冒険に出かけると、
私たちだけの特別な発見がありました。

富士急ハイランド駅

<トーマスランド>

FUJI-Q HIGHLAND STATION
<THOMAS LAND>

河口湖駅

<富士河口湖温泉郷>

東桂駅

Higashikatsura



フィールドをつくる

かわくちこ
河口湖と富士急ハイランドは人気の観光名所だ。その最寄りの駅である河口湖駅と富士急ハイランド駅をつなぐ道には無駄なものがない。シンプルなまちだからこそ、洒落たお店が目に入りやすい。富士山麓レストラン「TOYOSHIMA」もその一つだ。

佐藤優美（国文学科2年）＝文・写真



無機質だが温かみのある空間。富士の樹海をイメージしてつくられたそうだ

楽しいフィールド

青い外壁が道ゆく人の目をひく。大きなドアには猟銃をかたどったドアノブが黒く光っていた。富士山麓レストラン「TOYOSHIMA」は、豊島雅也さん（36）が経営するフレンチレストランだ。完全予約制で、食材は富士山周辺のもの厳選している。「ちょっとふざけているやっがいることを知ってもらいたい」と、お話してくださる豊島さんの目は楽しそうに輝いていた。

豊島さんは静岡県出身だ。多様な職歴を持っていて、長野県や愛知県などで料理人をしてきた。駅前のにぎやかなお店から閑静な軽井沢のホテルに移ったとき、「一つひとつに向き合える仕事がいい」と考えるようになったそうだ。「忙しくてね、たくさんお客さんがいたほうが、経営的にはいいんだろうけど。でも、そのときにしっかり100パーセントの料理が出せているかっていつ

たら、出せてないような気がして」。その言葉からは、料理人としてのプライドを感じることが出来る。「食材と向き合う」そして「お客さんに100パーセントの食材をだす」をかなえるために、2017年にレストランを開業させた。

自らが提供する料理にも「食材と向き合う」姿勢が貫かれていて。開業当初は地産地消をやるうとしていたそうだ。今は食材を山梨県に特化せず、富士山麓に範囲をひろげている。「やっぱり食材探しのワールドは広いほうがいいし、お客さんに来てもらうにはより『変なこと』をしないといけないですね。地産地消はどこでもやっているし」と、ニヤリと笑う。「食材と向き合う」ということは、生産者さんや猟師さんとも必然的に付き合っていくことになる。豊島さんからは生産者さんへの尊敬が感じられる。「おいしいものがあるなら使わせてください。発信しますって感じですよ。地元の人



①厨房の勝田さんと楽しげに語る豊島さん ②厳選されたこだわりの小物 ③30本ほどのパンを仕込む勝田さん

と一緒に発信していきたいんですよね」。ワールドは楽しいほうがいい。それは生産者さんと豊島さんが高めあいながら食材の良さを伝えていくための、揺るぎない考えだ。

河口湖でくらしつく

お店のこだわりについてうかがうと、豊島さんは、厨房で作業をしていた従業員の勝田翔馬さん(25)に話をふつた。勝田さんは仕込みの腕をとめずに「やっぱり、素材の味をそのまま使っていることじゃないですかね」と迷いなく答える。豊島さんは「いいこというじゃん」と茶化しながら、「引き算の料理つてやつですよ。食材の良さをいかすつていうか」とつづけた。「あとは、お客さんにあった料理をだすこと。うちは予約制だし、高いお金をもらっているから、お客さんに合った料理を出したいんですよ」。それは、お客さんからの注文にこたえる、というものではない。あくまで



ほうとうに似せて作ったパスタ



鹿肉やイノシシの肉を使っている



山梨の地鶏を使ったメインディッシュ

自分主体でお客さんそれぞれにあった料理をつくることだ。「鉛筆のよ
うな人間になれ」という言葉を豊島
さんが教えてくれた。それは周りに
気(木)を使って芯のとおった人間
になりなさい、という意味だ。お客
さんを観察し、その人にあつた料理
を提供すること、いいものを使い素
材を大切にしていくこと、は豊島
さんを貫く芯になっている。「流さ
れたり、曲げたりするとプロとして
やっていけないです。とくにこんな
辺鄙な場所でお店をやっているか
ら、こだわりがないと人が来ないで
す」と真剣に言葉をつむいだ。山梨
県は東京都や長野県に行きやすく、
観光客がたくさん訪れる。しかし、
飲食店の選択肢が少ないためどうし
ても通過点で終わってしまう、とい
う課題があるようだ。豊島さんは、
山梨県には観光としてのレストラン
が必要である、と熱く語っていた。
「山梨のお酒を召しあがっていただ
き、ホテルにとまってもらう。そう

すると、地域にお金を使ってもら
うことになる」。豊島さんは「自分の
住んでいる場所を楽しもう」、「いい
ものを提供しよう」とずっと言い続
けていた。観光というのは、その地
域のすべてのお店が協力しなければ
ならない。全部、自分が楽しむため
に考えていることなんですけどね、
といいながらも河口湖の行くすえを
本気で変えようとしているようであ
つた。

教育者になりたい

これからやりたいことをうかがつ
た。「やることは一つですね。生き
る力をつけた子どもたちを育てる、
子どもたちが帰ってくる場所を作
る、ですかね」と楽しそうにおつしや
る。お店や料理のこととはまた話が
変わった。豊島さんのいう生きる力
とは、子どもたちに選択肢を増やし
てあげることだ。例えば、火をつけ
る方法を知っていれば、停電になつ
たときに火を起こすという選択肢が

生まれる。山梨県の自然が豊かなこ
とを知っていれば、子育てをする場
所に山梨県という選択肢が増える。
幼少期に生きる力をつける体験が、
人生における選択肢をより豊かに
していくのだ。豊島さんが考える教
育と料理、いつけん関係ないような
気がするがそんなことはない。どち
らも、「自然と親しむこと」と「自
分のフィールドを楽しむこと」につ
ながっている。

* * *

「私の目標は店を閉めて教育者に
なることです。来年、都留文科大
にいくかもしれません」と豊島さん
はしめくくつた。ぶれない「芯」を
もっている豊島さんは、本当に生き
る力がつく環境を作ってしまうかも
しれない。
プロフェッショナルである豊島さ
んは、仕事だけではなく、将来の展
望にいたるまで全てに一本の「芯」
が通っていた。

ブクと火祭り

「吉田の火祭り」とは、富士山の「お山じまい」の秋祭りである。感染症の拡大をうけ、昨年度は中止となり二年越しでの開催となった。火祭りの炎は私たちに何を伝えてくれるのだろうか。

8月25日

年に一度、「吉田の火祭り」の日には、金鳥居かなとりいから北口本宮きたぐちほんみやまでの通りに大松明おたいまつがならぶ。それらが点火されると富士吉田のまちが火の海になるのだという。

富士吉田にお住まいの渡辺さん(85)に、明日の祭りについてうかがうことができた。明日の午後から

通りを交通規制し、松明を道に立てるのだという。明日は祭りに参加されるのかとたずねると、渡辺さんは首を振った。「その……兄が亡くなつてね。親族とか身内に不幸があつたら祭りには参加せずにホテルをとつてね、この場所を離れるんだよ」。話しづらいことだろうに、渡辺さんは丁寧に伝えてくれる。申し訳なさそうな顔をしている私に気づいたのか、「そういうお祭りだから」とやさしく付け足してくださった。

火祭りには「ブク(服)」と呼ばれる習わしがあるのだという。ブクとは親族に不幸があつたことを指す。火祭りは清浄であることが求められることから、ブクの家ものものは火祭りの神輿や火を見ることを避けなければならないそうだ。

清純を順守させるようすからは、今まで体験してきたような祭りの浮足立つたにぎやかさは感じられない。明日、このまちはどのような顔を見せるのだろうか。

8月26日

北口本宮には、浅間神社と諏訪神社というふたつの神社が置かれている。敷地内はひろく、杉林にかこまれた参道は重々しい雰囲気満ちていた。

境内のなか、色とりどりの法被を着た人びとが本宮へと向かっていく。「本殿祭」と呼ばれる神事だ。あたりは仄暗く、祭りらしい音色が境内に響きだす。それはまるで始まりの合図のようだった。

祭りを取り仕切る祭典世話人のための合図で神輿が神社から担ぎ出された。神輿は参道を駆け出していく。「わっしょいわっしょい」という掛け声とともに進む二基の神輿を追う。今年は感染症の影響で、参道

をぬけた先は機械で運搬することになっていた。

神輿がフォークリフトに設置されると、御旅所というゴールに向かって進みだした。勢子と呼ばれる担ぎ手たちは神輿を取り囲むようにして進んでいく。落ちないようにと神輿を支える手はいつしか神輿に触れるだけとなった。それでも彼らが神輿から手を離さないのは、担ぐことがかなわずとも祭りとつながっていたいからなのだろう。

夕暮れに差し掛かるなか、神輿はまちを進む。掛け声は神社を出てから一度も弱まることはなかった。

御旅所につくと、いよいよ松明へと火がともされた。吉田のまちが大きな炎でいろづいていく。日暮れとともに、北口本宮へと到着した。すべての松明への点火が終わろうとしている。杉林に囲まれいつそう暗くなつた参道を、ぼんやりとした灯笼



とごうごうと燃える松明が照らす。「最後の一本になります」。その声とともに松明に火が灯される。自然と巻き起こった拍手のなか、熱風が肌を抜け火の粉が舞う。あたりの空気をすべて食らい尽くすかのよう、縦横無尽にすがたをかえながら炎は吉田の空に燃え上がっていった。

9月5日

吉田の人にとつて、火祭りとはどのような存在なのだろう。祭りをとおし、そのことがずっと気になっていた。

「一年のはじまりにして一年のおわり」。以前に祭典世話人を執り行ったかたは火祭りについてそうおっしゃる。この言葉が胸にストンと落ちた。「ブクつてのがあるでしょう。身内がみんな無事でいらればお祭りに出られるし、不幸があれば出られない。火祭りに出れるってことは

祭りが終わってからはじまるまでの一年をまたみんな一緒に迎えられることになるんです」。

火祭りのブクについてぼんやりと考えた。不浄をきらい、神様のたたりを受けてしまうから家を離れる。きびしいように感じられるが、私にはある種の優しさのように思えた。

吉田の人びとにとつて火祭りは気持ちのうえでの一年の区切りだろう。大切なひととその節目を迎えることができなかつた寂しさをやわらげるためにも、故郷を離れるのではないだろうか。まちを離れて過ごす時間にも、誰かを思う気持ちが存在している。言葉を伴わなくとも、気持ちを伝えることができる。会いたいひとに満足に会うことのできない毎日がつづくなかで、そのことは大きく私を勇気づけてくれた。

高木帆月(比較文化学科2年)

|| 文・写真

ひと駅まえでおりてみる



富士山が日々の営みを見守ってくれているようだ(2021年10月11日)

その日、携帯の歩数計は10キロ歩いたと記録していた。こんなに歩いたのはいつぶりだろう。疲れよりも楽しさがまさって、また来たいと思える。歩きたびにお気に入りの場所が増えていく。このまちをもっと知りたくなり富士山駅と月江寺駅げつこうじのあいだを何度も歩いた。

阿部くるみ(地域社会学科2年) || 文・写真

満月と猫

月がきれいに見えるまちなのだろうか。ふだんは降りることのない「月江寺」という駅で電車を降りる。その日はタイミングよく満月で、富士山のかたちも綺麗に見えた。駅前通りを歩いていると、近くの居酒屋から出てきた白黒のネコがこちらへ歩み寄ってくる。人懐っこく、私のまわりを自由気ままに歩いていた。白黒で顔の模様が八割れ(※)だったので、そのネコを「はちさん」と勝手に名付ける。ネコ好きの私はひたすらシャッターを切った。はちは、寝転がったり背を向けたりと私を気にも止めていないようです。しばらくすると、はちはもとの場所へと戻っていった。

この出会いはドラマの一場面のように、私はすっかり主人公になった気分でした。なじみのない場所を歩くと、お店の看板やポストが特別に見えてくる。自分だけが知っている場所を見つけたようで、思わず鼻歌をうたいそうになった。次に来るのはいつになるかなと、はやる気持ちを抑えながらカレンダーを見つめた。

※ネコの斑が、鼻筋を境に左右に分かれているもの



- ①テレビ番組でも紹介されたことがある自動販売機(2021年8月1日)
- ②夕方の薄暗さが、神社により厳かな雰囲気漂わせる(2021年7月22日)
- ③はちさんがくつろいでいる。行く先で名前を変え可愛がられているのだろう(2021年7月5日)

ナゾの自動販売機

はちさんとの出会いから2週間ほど経ち、この日は月江寺駅の裏側へ回ってみた。路地を進むと、「倉沢製あん所」とかかれた看板が見えてくる。「え、自販機があるよ」。友人とともにその場へ駆け寄る。お店の前にはさまざまなおあんが入った自動販売機が置かれていた。こしあんやつぶあんなど見慣れた名前だけでなく、ゆずあん、うぐいすあんなど味が気になる商品もある。悩み抜いた結果、ゆずあんの最中もなかを購入した。甘すぎず、ゆずのさわやかな酸味が口のなかに広がる。あつという間に食べきっていた。次はトースト用を買ってみよう。私の地元では、あんバターが塗られているコッペパンが有名だが、トーストでも楽しめそうだ。

卵の自動販売機などを参考に開発をかさね、今ので二代目だ。この自動販売機をひと目見ようと、近くの忠霊塔へ向かうさいに立ち寄るかたも多い。和子さんは今までのお客さんについて丁寧に箱から出すように話してくださる。一つひとつの出会いを大切に作る姿勢をみて、倉沢のあんこはバトンのように人と人をつないでいるのだと感じた。

赤く腫れたお土産

この日は富士山駅で電車を降り、月江寺駅を目指して進む。その途中、弁天公園べんてんこうえんに立ち寄った。日中の暑さとは一変、夕暮れどきになり涼しい風が吹いてきた。木々がざわめいている。その音にずっと耳をかたむけていたくなるほど過すごしやすいくらいの公園だった。公園内には、山ノ神社と宗吾神社そうごじんじゃという二つの小さな神社があった。公園内に神社があることにも驚いたが、神様どうしがケンカしないのだろうかと少し心配になる。公園の向かいにも神社が見えた。市杵島神社いちきしまじんじゃといい、学問の神様である藤原道真ふじわらみちまことが祀まつられているという。訪れた日は学期末だったため、無事に単位がもらえるようにとお願ねがいした。「欲張りすぎた

かな」。そんなことを思いながら神社を後にし、月江寺駅へ向かった。

駅につくと、足や腕に違和感がある。「かゆい」。そう思ったが最後、合計10か所以上蚊に刺されていたことに気がつく。思いがけないお土産をもらっていた。夏場の公園に虫よけをせずに立ち寄ったことを後悔した。次に行くときは万全な対策をしよう。蚊に刺された思い出も含めて、また新たにお気に入りの場所が増えた。赤く腫れあがった足に「かゆくない」と言い聞かせながら、帰りの電車に乗りこんだ。

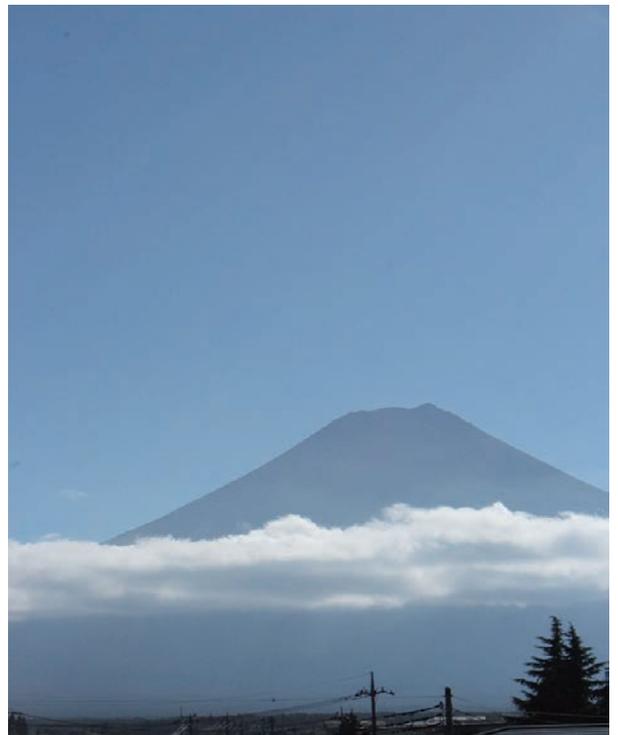
日本一と日常

その日も日本一の山は雲隠れしていた。私が富士吉田市を訪れると曇りが多く、きれいに富士山を見たためしがない。月江寺駅から富士山駅へ線路に沿って歩いてみると、後ろのほうで遮断機のおりる音が聞こえてくる。河口湖方面から来たのは特急電車の富士回遊だ。線路内には標高800メートルを示す看板がある。この場所は景色をささぎるものがないため、電車と富士山を写真に収める絶好の場所になりそうだ。晴れていれば富士山を

一望できるはずだったのに。悔しい気持ちを抱えながらその場を後にした。

数日後、朝から気持ちのいい秋晴れが広がっていた。今日ならとっておきの富士山を見ることができるので、あの場所へ向かう。到着すると、目の前には包み込まれそうなほど大きな富士山が見えた。中腹部に帯状の雲がかかり、その上から頂上がのぞくようすは標高の高さを物語っている。

本学周辺は山に囲まれていて富士山が見えない。そのため、すがたが見えるという嬉しくなってしまう。このまちでは生活のなかに富士山が溶け込んでいなのだ。商店街のアーケードの先や駅のホームなど、いたる所から目に入る。マンホールや街灯の飾りにも描かれていた。まち全体で富士山を大切にしながら暮らしているのが伝わってくる。



富士山の大きさに思わず息をのんだ (2021年10月11日)

* * *

あえて一本早い電車に乗り、ひと駅まえでおりて「駅間」を歩く。富士山駅と月江寺駅のあいだには、また歩きたいと思わせる魅力が詰まっていた。何度も歩いていううちにインターネットや本のなかにはない、私だけのお気が増えていく。誰かに教えたけれど、秘密にもしておきたい。この葛藤が癖になりそうだ。まだまだ頭のなかの地図が充実していく予感がした。



路地裏をたずねて

渡邊唯 (地域社会学科 3年) = 文・写真

月江寺駅げつこうじから下吉田駅しもよしたまでの「駅間」を歩く。このまちには私の通っていた高校があり、馴染み深いけれど、「知っているようで知らない」まちだ。風が冷たい10月28日、駅から実家への帰り道とは反対の方向へ。あまり歩いたことがない道を進んでみた。

映画のような



月江寺駅で下車すると、いつも駅前で一匹のネコが道ゆく人を観察している。「行ってくるね」とネコにあいさつをして居酒屋の横を通り過ぎた。このあたりは路地がたくさんあり、商店街や居酒屋などの通りが広がる。どこも昭和の面影をのこした風景で、雑多な雰囲気がちのあたたかみを演出している。まち全体が映画のセットにも見えてきた。そういうえば、先日観た60年代を舞台にした映画に出てくるまちなみに似ているなあなんて考えていた。

古い建物が多く、ひっそりしたまちかと思いきや、車通りが多く、通勤・通学する人のすがたをよく見かける。お店をのぞくといつも人がいて、常連のお客さんが店主と立ち話をする風景があらこちらで見られた。

コロッケとアヤコさん



月江寺を歩くことになって真つ先に行きかけた場所がある。揚げ物専門店「日の出屋」だ。創業60年以上のこの店は、店主のおじさんがひとり切り盛りしている。高校生のころは、この通りで行われる市民夏祭りに毎年おとずれていた。コロッケ片手に、屋台をまわっていたのを思い出して懐かしくなる。感染症の影響で祭りがなく夏がつづき、そんな記憶も忘れてしまっていたことに気づく。今日の散歩で少しづつ、過去の思い出を拾い集めているようだ。

「お姉ちゃんさつきスーパーにいたかい」。コロッケが揚がるのを待っていると、知らないおばあさんに話しかけられた。身に覚えがなくてきょとんとしている私に、「駅のほうまで行くなら一緒に帰ろうよ」と言っておばあさんは坂をずんずん登って行く。道すがら、おばあさんは80歳を超えていて、アヤコさんというお名前であること、若いころに商店街で働いていたことを教えてくれた。

アヤコさんはひとり暮らしで、日の出屋のコロッケをよく買って帰るそう。肌寒い帰り

道に二人でコロッケを頬張りながら、若いうちにやっておくべきことや、人生について語り合った。10分ほど歩いて、アヤコさんは踏切の向こうにあるという自宅に帰っていった。「また見かけたら声をかけてね」。軽快に笑いながら歩く背中を見送る。彼女からエネルギーを分けてもらい、足に力がみなぎった。それまでは、慣れない場所の散歩で少し気が張っていたのかもしれない。年の離れたお友だちとの出会いが肩の力をすつと抜いてくれた。

月の江書店のよしえさん



アヤコさんに背中を押され、私は今まで行ってきたことがないお店を訪ねることに決めた。後輩を連れて、月江寺大門商店街を散策する。西裏通りから曲がってすぐ「月の江書店」という本屋を見つけた。いかにも年季が入った看板がひととき目を引く。ガラス戸を開けると、昭和の歌謡曲が響いた。店の奥には店主のかたが作ったのだろうか、かわいらしい布製の小物が飾られている。ずらりと並んだ本棚には最近流行りのアイドルや俳優が載った雑誌がならんでいて、今は令和だということ

手にとつてあれこれ本を見てみると、店の奥から店主に声をかけられた。刑部よしえさん(70)だ。私たちが本誌をつくっていることを伝えると、富士吉田市の観光ガイドを取り出して地域のことをいろいろと教えてくださった。北麓地域をまわって富士山を撮っている写真家のことや、富士吉田市出身の歌手「フジファブリック」の志村正彦さんのゆかりの地など、地元ながら知らないことがたくさんあることを痛感する。私は今までなんとなくの雰囲気ではかこのまちを知らなかったのだ。そう思うと、自分の足で知らない場



戦後からつづく月の江書店



ちゃぶ台を囲んでのんびりすごす

所を開拓したいという気持ちがいっそう強くなった。

直子さんのひみつの隠れ家



夕方5時、「子の神通り」と書かれたネオンが怪しくピンク色に光り、頭上のちようちんにも明かりが灯る。狭い路地がちようちんの明かりに照らされるさまは異世界への入り口のようなのだ。この通りから出て本町通りを南にのぼると、ガラス戸の向こうにこたつで談笑する家族が見えた。店の手前側ではお惣菜が売られているようだが、民家のようにも見

える。なかに入ってよいものか悩んだが、戸を開けてみると、店主の女性があたたくかき迎えてくれた。店主の遠山直子さん(51)によると、ここは「まつや茶房」というカフェ兼イベントスペースだそう。

「二階にのぼって、好きな席を使ってくださいね」。そううながされ階段をのぼって目を見開いた。こじんまりとした和室は、太宰治ゆかりの天下茶屋を思わせるような雰囲気だ。壁一面にはレコードが貼られている。障子は花札で装飾されていた。思わず「こんなところがあつたんだ」とつぶやく。建物の元オーナーが大のレコード好きで、コレクションが大量にあつたため、壁紙のかわりに貼つたのだそう。外観からはまったく想像のつかない内装に、ひみつの隠れ家を見つけたように胸が弾んだ。

直子さんは、まつや茶房を妹さんから引き継ぎ、今年で3年目になるという。こだわりのコーヒーや薬膳ドリンク、軽食などがいただけ。その日は肌寒かつたので、私は薬膳チャイを注文した。飲んでみると、お湯の温度はちようどいいのに、体の芯からぽつと熱を感じる。直子さんは「体が喜んだり、元氣

になるものをお出ししたいと思つています」と笑みを浮かべる。

「寝つ転がつて休んでもらつていいですよ」と言われて、横になつてみる。お店で寝転がるなんて悪いことをしている気分だが、その背徳感がまた心地いい。丸一日歩き疲れた体がほぐれて心が落ち着いていく。

* * *

休みながら今までの道のりを振り返つた。通り沿いや細い路地の先、いたるところで、出会つたたくさんの店主やお客さん。誰もがほがらかで、気さくな笑顔が頭にかぶ。レトロなお店は、はじめは入るのにちよつと勇気がいるけれど、踏み出せば必ず素敵な出会いが待つていた。

古くから愛されるお店と新しい建物が混ざつた路地。ネオンが光る通学路。ちぐはぐだけだけバランスが取れていて、とりこになる空間があつた。路地裏をたずねることで、映画のセットのように見えていたお店一つひとつに、まちの人の息づかいを感じる。電車で通り過ぎていただけのまちが、今では愛着あまるまちに変わつていった。

引き出しのなかの傘

しもよしだ
下吉田駅から徒歩7分のところにあるギャラリー「FUJIHIMURO」
で開かれていた展覧会を見つけた。「花、ひらく」という傘の展
覧会だ。西桂にある織物屋さんの「榎田商店」と、その商品を広
めようとする「装いの庭」。この二つの会社が作った渾身の空間
に出会うことができた。

高橋杏佳(地域社会学科2年)=文・写真

魅力いっぱい傘

7月3日は前日の大雨が止んだものの、重い雲が空をおおい蒸し暑かった。葭池温泉前駅から下吉田駅までの「駅間」を目的もなく歩く。一軒家の庭先で話す人や川で水浴びをする鳥もいて、ゆったりとしたときの流れを感じた。いったん下吉田駅まで進んだあと、行きとはちがう道でもどる。すると、入口に大きな垂れ幕がかかっている建物を見つけた。その垂れ幕には「榎田商店」と書かれている。マップを確認しても情報がないため、なかに入ってみることにした。

「わあっ、すごい」。すぐに声が出る。さまざまな色や模様の織物の生地が何本も天井から吊るされていたのだ。その生地は野菜をモチーフにしたもので、それを使った傘も展示してある。「好きな『菜』を収穫してください」と書かれてあり、くすつと笑みがこぼれた。隣の部屋にはあじさいの傘が展示されている。流れている音楽や壁の色と相まって、暗く感じる梅雨にあじさいを見つけたときのちよつとした幸せを思い出す。その隣の部屋は、ぱあつと明るくなるひまわり畑だ。開いたひまわり柄の傘が何本も吊り下げられている。販売されている傘を取れば手になじむようで、大切に使用したいと思わせてくれた。裏地は表と違った色で織り込まれていて、傘をさすとき、自分だけが見える模様になり、踊りそうだ。

生地は一色に見えても、じつさいは白い糸との細かい縞模様になっていたり、より濃い色が入っていたりする。傘を見てみると、お店のかたが「全部同じように見える水玉模様でも、織りかたを微妙に変えているんですよ」と教えてくださった。たしかに、糸が縦、横、斜め、さまざまな向きに走っているように見え、光のあたりかたによって見えかたが少しずつ変化する。「お土産にどうぞ」と生地がついたショップカードをいただいて帰った。家でもいろいろな角度から光をあてて見返し、その変化にみとれてしまった。

織るための計算

7月25日にもう一度行ってみると、その日は子どもたちが多く来ていて、傘のお花畑を楽しんでいるようだった。担当のかたが「傘にするためには織物の密度をあげなければならぬんですよ」と教えてくださ



る。雨が漏れないようにするためだ。また、ひまわりの傘に使った生地を見せながら、「黄色の緯糸の密度を変えろ織りかたで、黄色の濃さを変えているんです」とおっしゃった。たしかに同じ黄色でも、とうもろこしをモチーフにした傘は優しい黄色、ひまわりの傘は力強い黄色と、まったく色合いが異なっている。一つの色を変化させるには、緻密な計算が必要なだろう。

続けるために変わる

榎田商店は創業から150年以上が経つ。8月1日に展覧会を訪

れたときには、その五代目社長、榎田則夫さん(74)がいらっしゃっていた。まずは、生地についてお話をうかがった。野菜をイメージして作った傘には伸び縮みする糸を使ったものがあるという。「伸び縮みする糸では、少しの引っぱりかたの違いで出来あがりに違いが出るんですよ」。生地を織る工程でもっとも気を使うことらしく、計算して作られているのがわかった。そのほかにも会場で流れていた製造工程のビデオを見ながら、細かい流れについて説明してくださいました。榎田さんの口調は優しく、とてもいいねいだ。しかしそれだけではなく、歴史ある店の社長としての厳かな風格が伝わってきました。

私は榎田さんに「長いあいだ、続けるためには何か変わらないものがあるのですか」と尋ねてみる。すると、「変わらないというか、常に新しいことにチャレンジすることですね」とおっしゃった。その言葉にハッ

とする。「続ける」というと、何か一つのことをやり続けるとばかり思っていた。しかし、何かに固執するのではなく柔軟に変化していくことが大切なのだ。今もその歴史をつなぐ榎田さんだからこそ、言葉に重みがある。もちろん織物へのプライドやこだわりも忘れてはいない。その証拠に、野菜や花の傘、水玉の傘など、さまざまな挑戦をしてきた榎田商店の傘はどれも手に取って開いてみたくなる。

二つの会社が作り上げる

展覧会は、繊維・アパレル産業の事業開発や市場をつくる支援をしている「装いの庭」が企画を担当している。その代表、藤枝大裕さん(37)にお話をうかがうこともできた。藤枝さんは展覧会の企画の誘致について、「めっちゃめっちゃ頑張りました」とはにかむ。伝統ある榎田商店のブランドを傷つけられないというプレッシャーがあったそうだ。そ



あじさいの傘の部屋。背景とあいまって、あじさいに落ちる雨粒が思い出される(2021年8月1日)



お花の柄の生地がついたショップカード
(2021年11月6日)

れでも、「地元の織物店と地域のかたをつなぐ役割を果たしたかった」と口にする。たしかに、都留周辺は織物が盛んなまちだと聞いていた。いっぽうで都留に住んで一年以上たつが、あまり触れたことがない。じつさいに見たおかげで「ただ知っていること」ではなく、実感できた経験へと変わった。

展示については、藤枝さんと楳田商店の担当のかたがアイデアを出し合ったという。作る過程を織つたすごろくや、生地をついたショップカードも、今回初めて作られたものだ。すごろくは社員さんのお気に入

りで、生地をつけたショップカードは、「手元に置いて、触れあえるように」という願いからだそう。どの展示にも必ずエピソードをつけて話してくださる。一つひとつに想いが込められているのを感じた。

引き出しをつくる

会場に来ていたかたが「昔この傘を買ったんだけど、良かったので娘や息子の嫁に何本も買いました」とにこやかに話した。一緒に聞いていた楳田さんの顔もどこか誇らしげだ。糸を綿密に織り、120日もかけて、ていねいに作りあげるから長持ちする。自分へのご褒美や大切な人へのプレゼントに買ってみたいと思わせてくれる。藤枝さんにもそのことを話すと、「そうそう。出会ってにおいて、自分のなかで引き出しとして持つにおいて、いつか買えたらいいな。そのいつかのタイミングで作れば」と、いたずらが成功した子どものように笑う。藤枝さんの狙



左から藤枝さん、楳田さん、楳田さんの奥さま。ほがらかな顔が印象的だった (2021年8月1日)

い通り、私は引き出しを作ってもらえたのだ。「そんな仕事についてみたい」。話を聞きながら思う。すぐに形になったり、お金が入ったりするわけではない。しばらくして引き出しを開けたとき、種から成長した花が咲くように、その人だけの特別な経験になる。そのときに、出会った日のことを思い出してくれるだろう。将来に悩む私だが、これから人生を考えていくための、一つの軸になるかもしれない。

* * *

偶然見つけた展覧会で触れた織物には、写真ではわからない模様の細かさや、光による変化があった。それは楳田商店がチャレンジをしつても、ていねいさは失わずに作つた生地だからこそ生み出されたものだ。藤枝さんを作っていたいた心の引き出しを開けるのはいつになるだろう。楳田商店の傘とともにまちを歩く自分のすがたを想像した。

くぐったさきには

7月中旬のよく晴れた昼どき、夏風に誘われ、わたしは今年一番の薄着で前から行ってみたかった^{よしのいけ}葎之池温泉へ向かった。葎池温泉前^{よしいけ}駅で下車するのは初めてだ。ちょっとした冒険心を抱いて歩きだした。

丸谷美寧(国際教育学科3年)=文・写真





大人数で訪れても、宿泊や食事を楽しめる

秘湯探訪

駅をでるとすぐに葭之池温泉の看板が目
に留まった。道順にそって歩いていくと「創
業安政三年」とかかれた現代風の看板もみつ
ける。添えられた英語に海外からの観光客も
想像できた。安政とはどれほど前のことなど
だろうか。駅名になるくらい地元に根差した
温泉のはずだ。奥まった場所に葭之池温泉は
あらわれた。まず趣のある宿泊施設が目に入
る。玄関の向かいには「葭之池」と掘られた
石碑も立っていた。水面はすっかり植物にお
おわれ本当に存在するのかわからない。

引き戸を開けると、ヒュルルルと機械
じかけの鳥が優しく高らかに鳴く。奥にある
まとまりのよいカウンターから、女将さん
である渡辺知恵子さん(84)が出迎えてくれ
た。外装とおなじ黒ずんだ内装を予想してい
たが、新築の雰囲気すら漂っている。お話を
うかがうと、彼女はのどやかに話しはじめた。
昔話が始まったようで、自然と耳を澄ませて
しまう。

葭之池温泉は今年で創業167年目を迎
えたそう。彼女は5人姉妹の次女として生ま

れ、父が病気になったことをきっかけに、経
営を引きついだ。母ひとりでの経営は難し
かったからだ。今ではお子さんたちと仕事を
分担しながら運営を続けている。

物語る葦

やがて富士急行線が開通し、駅名はなぜ
か「葭池温泉前駅」と「之」が省略された
と教えてくださった。昔は温泉施設が珍しく、
地域の人も足しげく通っていたそう。当時
から皮膚病に効くと評判のお湯だ。しかし、
まわりに施設が増えるにつれて客足は遠のい
ていったそう。

カウンター奥には所せましとサイン色紙
が飾られている。「自分だけの秘湯が求めら
れているのかもしれない」。お客さんは賢沢
な「おひとりさま」時間をねらって、お忍び
できているのだろう。感染症が流行するまで
は、海外からのお客さんも多く、英語が得意
な甥御さんが対応していたそう。彼女は、「外
国のかたは古風なのがお好きでしょう」と、
上品にほほ笑んだ。

葭之池と渡辺家の歴史は深い。池に生えた
葦を使って、一年の豊作を占うそう。この

伝統は代々、家系の男性だけに口承されてきた。知恵子さんの夫らがつくった占い道具は、富士吉田郷土資料館に展示されているという。カウンターわきにも、今年の結果が額縁に取められていた。「今は（男だけ継ぐという）そういうの、良くないかもしれないけれど」という女将さんに、時代の移ろいを感じ取った。さつきまではなんとも思わなかった池が神聖なものに思えてくる。ここにはきつと、妖しいなにかが宿っているのだ。

タイムスリップ

廊下をまがると、入口には浮世絵が描かれたのれんが掛けられていた。ひさびさの温泉に心が躍る。わたしは大の温泉好きだ。くぐったさきは、すぐ脱衣所だった。しかも、部屋の中央に一枚の仕切りが置いてあるだけで、脱衣所と浴場は地続きで段差がない。男湯との仕切りも低く、まるで江戸時代まで遡ったようだ。のれんの浮世絵のモデルが動いていたところに想いを馳せる。高い天井をみあげると、何本もの立派な梁がとおっていた。梁のまんなかには、亀裂が入っているものもあり、過去の震災を思い起こす。それでもな

お頑丈に建っているのは、当時の匠が手がけたおかげだろう。

浴場に進むと、石段にべたべたと足音が響く。シャワーはひとつだけだ。床からほんの少し浮いたくらいの木椅子に座り、汗を流した。浴槽には、少し高めの温度でお湯がはられており、入るとすぐに太もものうちがわまで熱が伝わってくる。奥のほうまで進み、うしろをふり返った。こちら側からみると、部屋が開放感に包まれる。こじんまりとしたつくりなのに不思議だ。浴槽が深いため、肩までしつかりつかることができた。

* * *

気持ちいい。心もほじめていく。じつくり温まりながら、幼いころに母とかよった温泉を懐かしんだ。

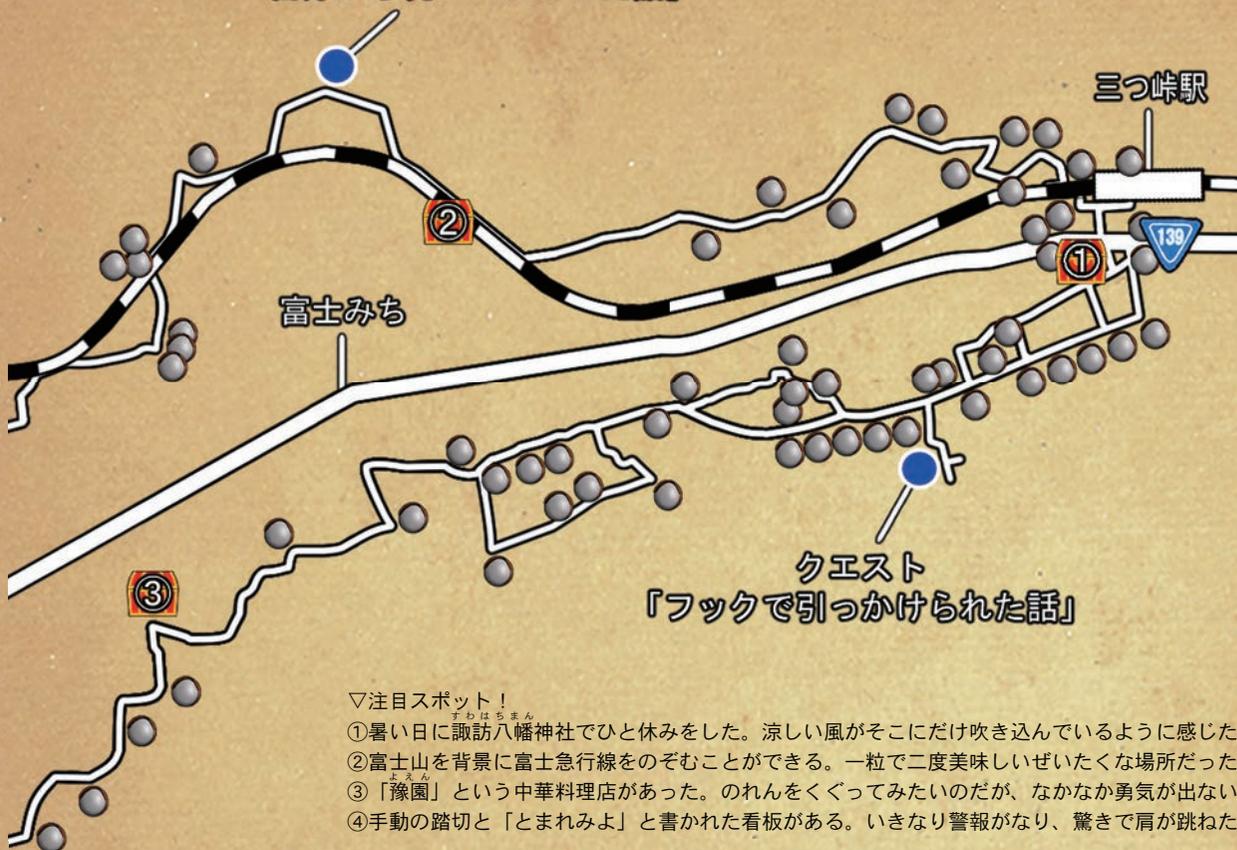
わたしにとって温

泉は、自分のいたわりかたを肌で知る大切な場所だった。一人暮らしをはじめてからは、効率を求めてシャワーばかりだ。そんな気ぜわしい日々、わたし自身も社会から答えを急かされているようで、慌てていた自分に気づく。「もっとゆつくり大事に生きよう」。のぼせた頭でまとめた、さっぱりとした目標も湯気が変わつてのぼつていった。

今日は、葎之池温泉から地域の歴史を垣間見ることができた。葎之池温泉は探しだした者のために、その魅力をしとやかに伝えてくれるらしい。夕暮れの心地よい風のなか、車通りの激しい帰路につく。近くでせわしなく音が響いても、わたしの心はまだ温泉でふわわとくつろいでいた。



クエスト 「自分から呪いにかかった話」



クエスト 「フックで引っ掛けられた話」

▽注目スポット！

- ①暑い日に諏訪八幡神社でひと休みをした。涼しい風がそこにだけ吹き込んでるように感じた
- ②富士山を背景に富士急行線をのぞむことができる。一粒で二度美味しいぜいたくな場所だった
- ③「豫園」という中華料理店があった。のれんをくぐってみたいのだが、なかなか勇気が出ない
- ④手動の踏切と「とまれみよ」と書かれた看板がある。いきなり警報がなり、驚きで肩が跳ねた

クエストは つづく！

クエストとは、冒険の旅を指す言葉だ。寿 駅と三つ峠駅をつなぐ「駅間」が今回の舞台である。リュックに筆記用具やカメラなどの道具と、大きな高揚感を詰め込んで、私のクエストは幕を開けた。
ことぶき みつとうげ
辻口いづみ(地域社会学科3年)=文・写真

▽旅の記録の話

7月16日、はじめての「駅間」散歩である。長かった梅雨がようやく明けて、久しぶりの蒸し暑さにめまいがした。寿駅の改札を抜け、「何もない」と声に出してしまふ。想像よりも自然に囲まれており、目立つ建物もコンビニ二ぐらいしかない。このまま富士みち沿いを歩くのはなんだか退屈だ。三つ峠駅を目指して知らない道を気の向くまま進む。

旅のさなか、幾度となく私の目に留まったのは、行く先にすらつと立っているカーブミラーだ。夏らしく澄んだ空や、若くやわらかな緑色の稲に、カーブミラーのオレンジ色がよく映える。歩いてみて実感したが、この「駅間」には急な坂や蛇行した道が多い。そのため、たくさんのカーブミラーに出会えた。

カーブミラーといえば丸い鏡のものを思い浮かべる。ゆるやかな曲線がなんとも愛らしい。しかし撮った写真を見返すと、四角い鏡のものや標識のついたものがある。支柱のさびや標識の文字の色あせぐあいから、設置年数の差も見てとれた。「カーブミラー」としてひとくくりにはできないくらい、表情やた



①②お気に入りのカーブミラーを選びすぐった(2021年7月16日)③一つの交差点に向かい合うようにしてカーブミラーが並んでいる。三つ巴の戦いを思わせた(2021年11月21日)

- クエスト
- カーブミラー
- 📦 注目スポット



たずまいが違う。見かけるたびに写真を撮らずにはいられなかった。この旅のゆくえを見守ってくれたカーブミラーは、旅を記録するセーブポイントになったようだ。

▽自分から呪いにかかった話

はちきれそうな大粒のイチジクをいただきます。窓から入る風に乗ってキンモクセイの香りが漂ってきたりと、急に秋めいてきた9月のなかごろ。秋の「駅間」を歩こうと、気づけば電車で揺られていた。このところ雨の日が多く、しばらくぶりの曇天でさえ明るく感じられる。

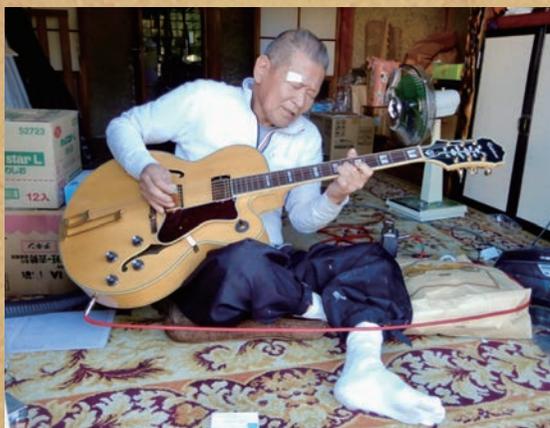
以前は通らなかつた道を行こう。そう決心して、どこへつながるのか予想もつかないままずんずん歩く。一人で心細かったものの、振り返ると、しるじろとしたもやに囲まれた富士山が雄大に広がっていた。頼もしい味方ができたようで、踏み出す足に力がこもる。

途中、人も車もあまり通らない道があった。こういう道を行くときは、「後ろを見たら幽霊がいるかも」と想像力がかき立てられる。正直、ホラーは大の苦手だ。しかし恐怖心とほうらはらに、脳内ではすさまじい早さで怪談がつくられていった。ブルツ、と背筋が寒くなり、その場を離れようと一目散に駆け出す。もちろん後ろにはなにもいなかったが、思い込みで自滅したようで恥ずかしさが込みあげてきた。

▽フックで引っかけられた話

今日は友人を連れて三つ峠駅から寿駅へ向かう。見事なまでに雲のない、真っ青な空がすがすがしい日だった。10月なのにこんなに暑いとは。半袖を出して正解だった。

出発して10分ほどたち、小ぶりのカーブミラーを見つけて浮かれていると友人が足を止



ごきげんにギターをかき鳴らすと、拍手せずにはいられないくらいに粋なサウンドが場を包んだ(2021年10月11日)

める。カーブミラーの背後に長い文章の書かれた看板が立っていたからだ。そばには大きな記念碑がある。看板の文字に目を通すと、どうやらこの碑は西桂で医師として尽力した川合立玄先生とつね夫人に対し、あとつぎの川合信水先生がその御恩を記念して建てたそう。昔、流行り病でもあったのだろうか。思いを巡らせながら歩を進めると、後ろから大きな声で呼び止められた。振り向けば、台車を手にした男性がほがらかに笑っている。手招きされ、私たちは木暮要さん(62)の家にお邪魔をした。座るよう促された窓サツ

シへ近づくと、部屋には無造作にCDが散らばり、弾ける準備はいつでも万端だと言いたげに、アンブとつなげたギターが置かれている。木暮さんの生きざまがひと目見てわかるような空間だった。

「俺がフックで(引つけて私たちを引き)とめたんだけど。まあ、10パーセントでも、20パーセントでも発信してくれば良いかな。……深掘りまでいなくても、西桂を歩いて一つのなんかを得てもらいたい」。そんな思いをもって私たちに声をかけてくれたそう。まずは記念碑について教えてくださった。

「聖域って言うのかな。そういうのが心の支えになって、病気になつたら川合さん行きやあ良いやつていう、唯一の、ね」と、当時の人びとに気持ちを重ねる。記念碑にまつわる歴史が書かれた本もお借りした。その本によると、立玄が西桂に「愛神堂病院」という病院を建てた年、疱瘡が流行したという。村人の4分の1が亡くなるという被害にあったが、立玄は西洋医学を活かして多くの患者を救ったそうだ。ほかに、感染症から得た教訓や自身の見てきた都留のようすなど、からからと大笑いしながら話す木暮さん。自らを

「ブルースじい」と称し、「10代からバンドだけはしてたんだよ」とギターを手に語る。あつというまに時間が経っていた。

別れぎわ、「世のなか単純だから、足を踏み外さなければほとんどフリーだから、なにをやりたいって言っても良いんだよ」と私たちに向けて語気を強める。思いがけない出会いに背中を押されたひとときだった。「会えて良かった」と口にした木暮さんのすがすがし目に焼き付いた。



この機会がなければ、行くことのない「駅間」だった。何度か自分の足で歩いた今では、見どころや気になる場所がいくつもある。道のほどに、中華料理店がぼつんとたたずんでいること。都留に比べて水の音や虫の鳴き声がよく響き、心地がよいこと。夕暮れどきになると、山を照らす光のぐあいや段々とグラデーションのようになっていくこと。クエストには隠し宝箱や隠しルートがつきものだが、この「駅間」にもまだ見ぬ魅力が埋もれているのだろう。どうやら、私の「駅間」攻略はこれからも続くようだ。

まどろむ空間

みつとうげ
三つ峠駅の改札を抜けて約10分。大通りを左折しようとして体の向きをかえたとき、向かい側にあるお店に目が釘付けになった。入り口の半分ほどが坂に隠れている。そんな前田商店は、時間を気にせず居続けたい場所だった。

広がる店内

お店のまえにならぶ数本ののぼりがゆるりと風にゆれる。お店というより一軒家に見えた。少し緊張しながら腰をかがめて入り口をくぐる。頭をあげるとショーケース越しに和菓子の目がある。視界に飛び込んだきた和菓子の距離の近さにおどろいて、つい目をそらしてしまう。ふとお店の奥をみると、黒みがかつた木の壁とガラス戸にはさまれた通り道が見える。風情あるたたずまいに、少しのあいだ足をとめて見入ってしまった。

「こんにちは」。私の声に応じてくれたのは前田和吉さん(86)と貴子さん(82)だ。息子さん夫婦と4人でこの前田商店を営んでいる。前田商店は創業して110年くらいになるのだとか。「明治からかな。正確にはわからないけどね」と、小さいころの記憶を呼び起こしながらお話ししてくださいました。土地や建物を少しずつ買い足したり改装したりして、現在の前田商店があること。かつては、お店のまえの道路を、馬車が走っていたこと。「昔のことを」きいておけばよかったね」と貴子さんは口元に小さく笑みをのせる。とき

おり和吉さんに確認しながら知る限りをお話してくださるすがたに、祖父母から昔話を聞いているときの光景が思い浮かんだ。

店内には、お惣菜から日用品までさまざまな品物が並んでいるが、創業当初はおまんじゅう屋さんだったそう。そのほかにも、手作りの餡も売っていたのだとか。「和菓子を作る職人さんがいてね、最盛期にはお店の人が5、6人いたこともあったんだよ。どこか誇らしげな声に、想像が膨らみ心が躍った。



前田商店の外観とその入り口

お店の奥にある、作業場も見せていただいた。年季の入った壁沿いに、見たことのない機械がいくつか並んでいる。「これ何ですか」と、工場見学にきた小学生のようについ矢継ぎ早に質問を投げかけてしまう。大福をつくるときに使う、もちで餡を包む機械や大きな蒸し器などを見せていただいた。「これね、鉄板。どら焼きなんかを焼くの」と、和吉さんがゆつくりと説明してくださいました。仕事道具というよりは、ともに店を支える仲間のような。職人らしい愛着を持っていることが、機械に触れる手のやさしさから伝わってきた。

突風が運ぶなつかしさ

興味のむくまま質問した私に付き合ってくれたお二人は、「どうぞここ座って」とご夫婦の定位置であろう場所に誘ってくれた。小あがりになつている和室に横並びで腰かけながらのんびりとお話していると、お客さんが来た。男子小学生2人組だ。もうランドセルを家に置いて遊びに出かける時間か。そう思いながら小さなお客さんたちを眺める。彼らは小銭をもって駄菓子を買いに来たよう



小あがりには腰かける和吉さんと貴子さん。ここで話を伺った

だ。流れるように自転車を止める。そしてヘルメットをかぶったまま駄菓子を選び、颯爽と走りさつていった。台風のような彼らのうしろ姿をガラス戸越しに眺め、なつかしいかと独り言がこぼれた。予算を超えないよう計算しながら駄菓子を選ぶようですが、記憶にある遠足に持つていくお菓子選びと重なる。彼らは近くの公園へ行ったのだろうかと思像していると、別の小学生2人組が来店した。今度は女の子だ。彼女たちも駄菓子や飲み物を買っていった。お会計をしているときに、ま

たお客さんが来た。友人のようで、驚きながらも声をかけている。このお店は、子どもたちにとって「いつもの場所」みたいなところなのかなと心がじんわりあたたかくなった。

想いは宿る

「古いだけだよ、こんなの」。趣を感じさせる雰囲気、素敵ですわねといった私にかけた言葉だ。貴子さんは首を左右に振る。けれど、さらりとこぼされた「お店をたたむ気はなかったから……」の言葉に、前田

(左) 作業場への入り口
(右) お会計中に、もう一組の小学生のお客さんが来た



商店を大切に思う気持ちがみえた気がした。お店の外と内では空気が変わる。車どおりの多い道路に面した場所にあるので、外はエンジン音が響いている。そんななか、お店に一歩足を踏み入れると、ふっと騒音がかき消える。前田商店のガラス戸と壁は、やわらかな結界のようだ。店舗部分では、ときに子どもたちのにぎやかな声が響く。店内と居間

の境目では、お客さんとのやり取りがうまれる。小あがりにはご夫婦の穏やかな空気が漂う。お二人の視線の先にみえる三叉路も、外ではやかましく思えた車どおりだつて、ここからなら穏やかな気持ちで眺められるから不思議だ。ふと「幸をもたらすつくも神」という言葉が頭に浮かぶ。もしかして、このお店自体がそうなのではないか。包み込まれるような雰囲気に、そう考えるくらい居心地がいい。先祖代々、想いととも大切に受け継いできた場所なのだろう。

水に絵の具がにじむように、「もつといたい」が心に広がる。小あがり座に座って眺める景色は、柔らかく心に留められる。飽きることなく、たゆたうように流れていく時間が心地よかつた。このお店自体にも、お二人にも、いつまでもあり続けてほしい。そんなお店でのひとときだつた。



「電車何時なの」と貴子さんに尋ねられた。あと10分くらいで行こうかと思っています、とこたえると、おもむろに和吉さんが立ちあがり、店頭へ歩いていかれる。「こつちおい

で、好きな選んで」。そう手招いて、お土産に和菓子をお包みとしてくださる。どれもおいしそうで選べない私は、おすすめめの和菓子をお聞きした。「おすすめはね、全部」。そう言つた和吉さんは、にやりといたざらつ子のような笑みを浮かべる。そして、これとこれと……と声が聞こえるように和吉さんが和菓子を選びだす。そんなに頂いてしまつていいのかとあわあわする私をよそに、和吉さんがゆつたりと和菓子を紙袋に入れていく。そこに、店の奥から「もうそろそろ時間だよ」と貴子さんから声がかかる。あわただしくお札を伝え、手を振りながらお店をあとにした。まだ電車が到着していないホームをみて、似たようなことがあつたな、とふと笑う。思ひ出すのは、実家からひとり暮らす部屋に戻るときの荷詰め時の光景だ。「これももつてけ」、「そんなに入らないでしょ」という両親の声が重なつて聞こえる。帰りがけに前田さん夫婦がくれた温もりのかけらを集めながら、マスクの下でひとり口を緩めた。また行こう。

林舞子(学校教育学科2年) 文・写真

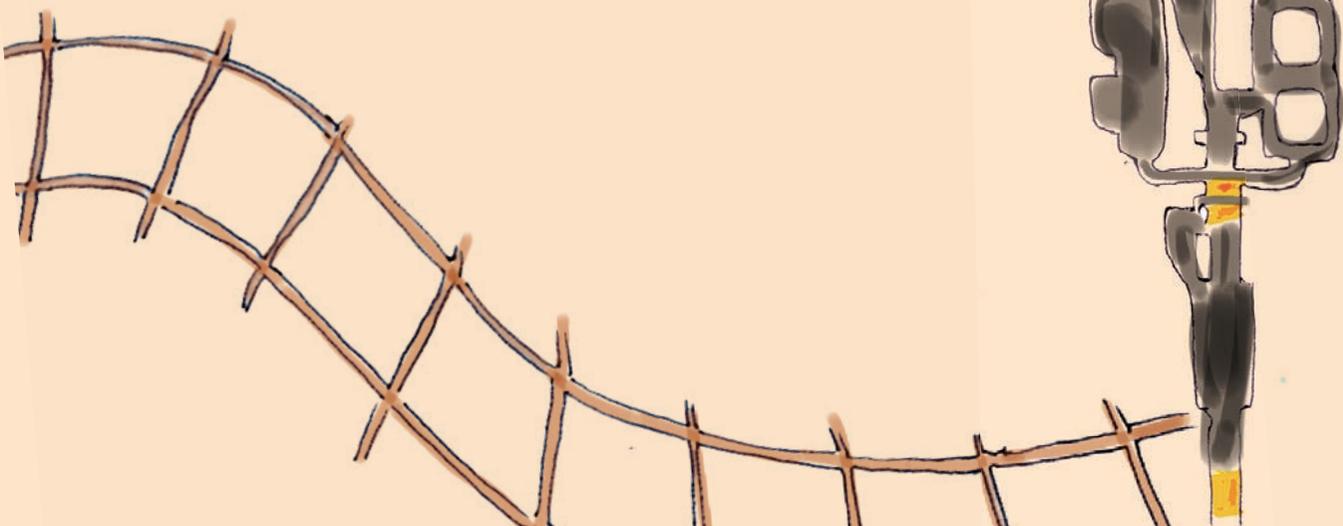
えきかん
駅間

今回歩いた「駅間」は、私たちのフィールドである都留からすこし離れた場所でした。知らないまちも、歩いたりお話を聞いたりすることで、だんだんと霧が晴れるようにそのようすが見えてきます。

ちがう道を歩いて、いつもは気にならない標識や景色にカメラを向けます。「駅間」ではそれぞれのやりかたでまちを発信する人がいました。また、その土地に長く根ざし、まちとともに過ごしてきた人たちにも出会いました。

何気なくとおりにすぎてきた「駅間」は、自分だけの発見と思いを刻んだ大切なフィールドとなりました。

次号では、東桂駅から大月駅までの各「駅間」を歩きます。



つるを味わう



暑さが少しやわらいだ9月下旬、わが家に都留市産の夏いちごが届いた。せっかくだから、夏定番のものに合わせてみよう。シロップをつくってかき氷にかけることにした。

砂糖とレモン汁でいちごを煮詰め、冷やしたらシロップの完成だ。ふわふわの氷が崩れぬよう、やさしくゆっくりとまわしかけて味わう。冷たくてキュンとすっぱい。濃厚ないちごシロップと、それをまろやかに引き立てる氷がよく合っていた。

都留市では、この夏いちごを自分で収穫することもできるらしい。来年は友人といちご狩りを楽しみ、それからシロップをつくりたい。

深沢有佳 || 文・写真

日々をつくる



パンは天然酵母や国産小麦だけでなく湧き水を使うなど、さまざまな材料にこだわってつくられている(2021年9月15日)

「石窯パン ほしのさと工房」では、天然酵母パンと自然食品の販売やマクロビオティック(※)の料理教室をおこなっている。今回は店主である山口とも子さん(73)に、この食事を始めるきっかけや食べものへの想いについてお話をうかがった。

ほしのさと工房

ひがしからち
東桂駅から南東に向かって8分ほど歩いたところに「ほしのさと工房」はある。ひっそりとした住宅街にあるお店は、まるで隠れ家のような。ドアを開けて店内に入ると、正面のショーケースには、かぼちゃあんパンやチーズパンなど沢山のパンが並んでいた。開店してすぐの時間帯だったからか、より香ばしいパンの香りが鼻孔をくすぐる。

店内を見まわすと、味噌や醤油といった調味料や、乾麺や大豆ミートなどの食材が目に入る。この商品はすべて素材にこだわってつくられている自然食品だ。私は母の影響を受けて自然食品を利用しており、それがきっかけで「ほしのさと工房」を知った。自然食品を扱っているお店は少なく、山口さんには都留に来たときからお世話になっている。

食習慣と健康

山口さんの食療法であるマクロビオティックを一言であらわすと「動物性食品が一切入っていない食事」だそう。肉や魚、牛乳や卵、それらを原料としてつくられた食品を摂

らないような心がける。玄米などの穀物と季節の野菜を中心とする、「玄米菜食」だともおっしゃった。野菜は無農薬・無肥料が望ましいため、山口さんの場合は畑を借りてつくっているという。お店のパンには山口さんの育てた野菜が使われているそうだ。「そのおかげなのか、かぼちゃを練りこんだ食パンはいつも完売なんです」と嬉しそうに話してくださった。

山口さんは初めからこのような食習慣だったわけではない。マクロビオティックを知ったのは、お子さんのアトピーがきっかけだった。当時からついていた皮膚科の先生に、薬で症状を抑えることはできるが、副作用を考えると服用を続けるのはやめたほうがいいと言われたそう。その後、別の病院の先生に薬より安価な治療法として勧められたのが玄米菜食、マクロビオティックだった。薬にもすがらない思いで始めた食事療法だったが、次第にアトピーの症状は和らいでいったという。

しかし、お子さんの学校給食が始まり以前の食事に戻すと、山口さんはときどき体調を崩すようになった。一時は寝たきりや緑内障、失聴といった状態におちいったそう。改め

て食習慣を見直し、マクロビオティックを再開すると回復したのだという。

食べもので治す

病気を治すうえで大切なことは、血液をきれいにすることだと山口さんは語る。臓器を機能させているのは血液であり、汚れていると病気になるやすいそう。逆に病気にかかっても血液をきれいにすると、治りやすくなる。そして血液をきれいにするのが食事の役目だという。病気を克服した経験があ



店内にはパンの他に、食料品もずらりとならぶ(2021年11月10日)

るからこそその言葉なのだろう。初めて耳にする話に圧倒されつつ、食べものと体のつながりがより深くなっていく気がした。

口にすることで体ができていくのは理解していたつもりだが、食べものが持つ影響力を甘く見てしまっていた。「毎日食べるもので体ができていくので、食べものはガソリンと違う。ガソリンで車はできないけれど、食べものだと体もできていくのでね」。エネルギーになるだけでなく、エネルギーをつかう器そのものになる。その言葉を聞き、「食べものつてすごい」と、そう素直に感じた。

「ぜひね、病気がつてどういうことかかっていうことを若い人に知ってもらいたいです。薬はどういう作用をするか、食事はどうか」。そう口にする山口さんの視線は力強い。食事療法のうわさを聞きつけ、山口さんのもとに足を運ぶ人も多いそう。食べものをとおして人を想う気持ちが見えた。

* * *

取材を終え、お土産にもらったパンを片手に帰路につく。山口さんの経験や想いが詰まったパンはまるで名刺のようで、今回お聞

きした話が自然と頭のなかに浮かんできた。「日々、自分が取り入れたもので自分がつくられていく」。あたりまえのことだけれど、あまり意識を向けていないことに気づく。

口に入れたもので体がつくられているのなら、経験したもので心はつくられていくのかもしれない。山口さんとの出会いは、私に安心と自信を与えてくれた。これからどんな私をつくっていくのか。どんな日々を歩んでいくのか。そう考えると、胸がおどつた。

柏倉和奏(地域社会学科2年) 文・写真



玄米おにぎりやじゃがいもの煮物、味噌きゅうりをいただいた。お米や味噌も自家製のものだという(2021年9月15日)

燃える山を

さがして

「モルゲンルート」とは、朝焼けが山肌に反射して山が赤くなる現象のことである。いっぽうで「アーベントルート」とは、夕焼けで山が赤くなることをいう。山が赤くなる現象は、気温や湿度、風の強さや雲の有無などに大きく左右され、どちらも見るのは容易ではない。

忘れかけていた美しさ

9月19日、夏休みの帰省も終わりに近づいていたころ、6階にある実家から地平線に夕日が沈むのを見た。地元には人工的に植えられた木々が均等に並ぶだけで、自然に触れる機会が少なくなっていた。そんなとき久しぶりに夕日を見て、忘れかけていた自然の美しさにより強く魅了された。地元の夕日に魅了され、インターネットで夕日の写真を調べて

いると、赤く染まった山の写真を見つけた。山は燃えているかのようにまっ赤で、ぜひ都留で見たいと思った。都留では部屋のベランダから山が見える。周りの山には木々が自在にのびていて、森の香りや虫や鳥の声を身近に感じられる。山に夕日が沈むのを見るのは日常だった。朝は苦手なので、夕方に見えるアーベントルートを探すことにした。

アーベントルートをさがす

今年の春に城南橋じょうなんばしから撮った写真で、遠くの山がほのかにピンク色になっていたのを思い出した。9月29日17時ごろ、曇っていた空から夕日が差し込む。これは見られるかもしれない。自転車で城南橋へ急ぐ。しかし目的地に着く前に、再び夕日が雲に隠れてしまった。太陽が雲に隠れている日は、アーベントルートを見るのは難しい。その日は諦めて、翌日、ふたたびチャレンジすることにした。

次の日、今日こそはとやる気に満ちていた。写真と周りの景色を見比べながら、自転車で山へ向かう。やや曇り気味だが、太陽の光はきちんと差し込んでいる。これなら見られるはず。鍛冶屋坂かじやざかトンネルを越えると、そこに

は山が広がっていた。歩道の上で立ち止まり、辺りを見回す。近くには川があり、水の流れる音がする。川のそばの草むらでは、虫が鳴いていた。田舎のおばあちゃん家のような風景に思わずほほ笑む。

1時間ほどその場所において、山が赤くなるのを待った。遠くの山がうっすらとピンク色になったが、その山までの距離が遠く、思い描いていたアーベントルートではない。写真を撮ったが、あまりに山が小さくてピンク色になっているのもわからない。夕日が山に沈



遠くの山がうっすらピンク色に染まる (2021年10月16日)

① 6時28分



② 6時43分



わずか15分のあいだに色が刻々と変化するモルゲンロートを見ることができた(2021年11月5日)

んだので帰ることにした。自然の豊かさにふれた充実感もあったが、アーベントロートを見られなかったことが悔しかった。

10月16日、前に見られたところよりもっとあのピンク色の山に近づきたい。友人を誘って、見知らぬまちを地図も見ずに、山に向かってひたすら突き進む。しばらく歩くと、「文台山の湧き水」と書かれた看板を見つけた。毎朝、新鮮な水を汲みに行くのがひそかな夢だったため、湧き水を見つけて心がおどった。手で水を汲み顔を洗う。水が冷たくて、柔らかくて、ぬくぬくした体が冷めて気持ちいい。スッキリした気持ちになり、また歩き始めた。出発してから1時間ほどだったが、目指していた山は一向に明るくならない。そろそろ引き返さないと暗くなってしまう。そう思い後ろを振り返ると、黄金色の稲穂の向こうの山が、うつすらピンク色になっているのが見えた。美しい風景に、アーベントロートを見るという旅の目的も忘れて写真を撮る。しかし山は思ったほど赤くなく、アーベントロートと言うには程遠い。これだけ歩いて遠くまできたのに、都留でアーベントロートを見るのはやはり難しいのだろうか。

奇跡は突然に

11月5日朝6時ごろ、何気なく自宅のアパートの窓から二つ峠^{みつとうげ}方面を見ると、山が赤く染まっていた。今まで見たなかで山に一番近く、一番赤い。あまりの予想外の出来事に、呆然と山を見つめた。ピンク色というよりオレンジ色に近く、初めて見る色だ。窓を開けると、冷たい空気が部屋に入ってくる。消える前に、いそいで写真を撮った。20分後、山は元のすがたに戻っていた。この一瞬のあいだに山を見たのは私だけのような気がして、贅沢な気持ちになる。

* * *

朝は苦手なので、モルゲンロートは最初から見ようとはしなかった。アーベントロートも何度見ようとしてもいまだに出会えない。「早起きして、もつとまつ赤な山を見たい」。赤く染まる山を見て、諦めていた心に火が灯った。

霜田香菜子(国際教育学科1年) || 文・写真

野菜以上の

おくりもの



7月、色鮮やかな畑を横目に都留市田原の農産物直売所へ向かった。直売所ならではのハリのある野菜がならぶ。どんなかたが作っているのだろうか。農業をするやりがいを、出品者の内藤季行さん(69)と梅澤すみ江さん(68)にうかがった。

幸せのおすそ分け

内藤さんは、都留市農林産物出品者組合 J A 都留市農産物直売所で、組合長を務めている。「会社を退職してから、親の畑を遊ばせるわけにもいかなくて、農業を始めたんですよ。そうするうちにいいものができて、多くの人とわかち合えることが楽しみです。それが少しでもお金になりますし、孫たちの小遣いにも繋がるわけですね」とおっしゃる。お話を聞いたただけなのに、不思議と内藤さん

とお孫さんの笑顔が見えてくる。無事に作物の収穫を迎えられた喜びを、野菜を受け取る人とも共有できる。農業は内藤さん自身の幸せであり、生きがいとなっているようだ。

お話の途中で、そういえば、と野菜を育てている祖父を思い出す。出品してはいないものの、作りすぎたからといってよくおすそ分けしてくれた。くるんと丸まったキュウリに、でぶんと肥えたナスなど、一度きりしか出会えない形や大きさが魅力だ。野菜を味わう前から心がおどつてしまう。子どものころから苦手な野菜はなかつたが、祖父が育てたものとなれば愛着がわき、張り切つて食べていた。何より、いいのができたと、満面の笑みで詰め合わせた野菜を持つてきてくれた祖父が眩しく思い返される。内藤さんの言う「多くの人と分かち合う」とはこの瞬間のことな



値札をつけた野菜がカゴを埋め尽くしている。作業をしながら会話が飛びかう(2021年8月1日)

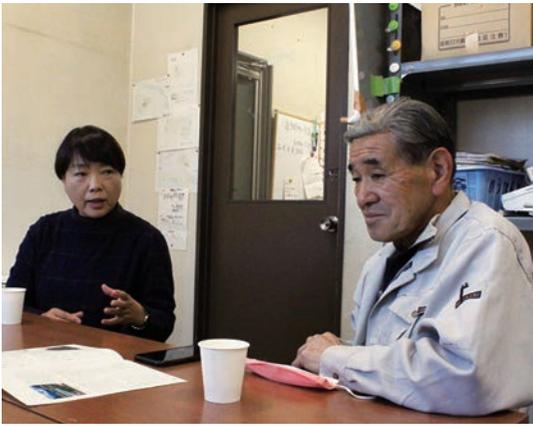
のだろう。祖父が足どり軽く野菜を届けてくれたのもうなずける。

それはまるでわが子

いっぽう、組合で庶務会計を務める梅澤さんは「種をまき、芽が出て、花が咲いて、実になる過程がすごく好きなんです。収穫できるのももちろんいいですけど、実りまでの過程を見ると関わつてこられてよかったなあつて嬉しくなります。そこから、消費者のかたに買ってもらえて『おいしかったよ』つて言ってもらえればそれが一番。次もまた頑

張ろうって思いますね」と、ほほえまれる。

ふと、小学生のところにミニトマトを栽培したことを思い出した。まわりのプランターと見比べて、私のより成長が早いものがあると思えた。懐かしい思い出を話すと、梅澤さんも「毎朝畑に行くと、トマトが昨日より赤くなっていると、変化が分かるんです」とうなずいてもらえて、嬉しくなる。「でも、途中で枯れてしまうこともあって。種から育てる野菜はとくに。水を一日忘れるだけでダメになっちゃうのね。」と、自然を相手にする難しさを語る声色は少し暗くなっている。



提供者の使ってほしい野菜が献立に反映されることもあると話す、内藤さんと梅澤さん(2021年11月27日)

た。内藤さんも「種から育てるときは子どもを育てるのとおんなじ。苗からの収穫と種からの収穫では感動が全然違う」。そう付け加えた。

育てるなかで、天候が原因で病気にかかると野菜も出てくる。農業をする過程での苦勞や悩みを直売所のみなどで相談しあえるところがいいところだと、お二人は口をそろえた。毎日、よりいいものを目指している証だろう。いつのまにか目の前にお二人が研究者のようにみえてきた。

野菜は子どもたちへ

また、お二人はジャガイモや水掛菜みずかけななどを学校給食にも提供されている。都留市の学校では給食中に、使用された食材と合わせて、農家さんの名前も放送されるそうだ。そうすることで、給食により安心感が加わるのだろう。自信をもって育てた野菜たちは生産者の皆さんの名刺のようである。「張り合いが生まれますよ、やつぱり。地元の農家が給食に携わることができて、名前を紹介してもらえるのはありがたいですね。」と言う内藤さんに、梅澤さんもうなずく。「今日はおじいちゃん

んのニンジンが出るから、ちゃんと食べるんだぞ。それで、仲間にも教えてあげなさい』って、孫に言うんです」。小中学校にかようお孫さんたちに内藤さんはそう伝えるのだという。給食でも自分の野菜を食べてくれることを満足そうに目を細めて語った。おじいちゃんおじいちゃんのニンジンニンジンを給食で食べられるお孫さんたちも幸せにちがいない。きつと自慢のおじいちゃんおじいちゃんなのだろう。

* * *

お二人が野菜をつくる裏には、手入れを欠かさず、質の高い野菜をつくるための努力がある。そして、見えないところで手間ひまをかけ、向上心と誠意の詰まった野菜が育つ。お二人の原動力は「多くの人に喜んでもらいたい」という気持ちだ。家族、お客さん、給食を食べる小中学生など、対象はさまざまだが、熱量は変わらない。「なるべくいいものを安く届けることが、ここの皆さんの想いですから」。そう繰り返すお二人の、信念をもって挑戦するすがすがしい目が浮かんだ。

谷朱理(比較文化学科1年) 文・写真

都留ハイキング日記

都留は四方を山に囲まれている。私は、せっかく都留にいるのなら山に登るべきなのでは、そう思った。そこで「都留アルプスハイキングコース」を月に1回、3ヶ月にわたって歩き、山の季節の移ろいを観察することに決めた。

8月31日

午後3時、私は一人で楽山公園の近くから森に入った。感染症の影響で、この日までの一週間ほどを家から出ずに生活していた。そのせいで一歩いっぽが重い。あいにくの曇天だったが、久しぶりに空のしたに出た私にとっては、まぶしすぎない最適な天気だった。

新鮮な空気を吸い込みながら、植樹された千本桜の脇道を進む。道にはぷつくりと丸いドングリが落ちていて、秋の訪れを感じさせる。しかしその色はまだ緑だ。モミジもまだ青々としている。予想よりも夏らしさは残っているようだ。しばらく進んで、一番高いところに出る。こんなに遠くまで見渡したのはいつぶりだろうか。家での生活が続き、近くしか見ていなかった目が、ぱつちり開いた気がした。ぱらぱら降ってきた雨が顔に当たって、ますます外に出てきた実感がわく。

もう少し登ってみよう、と一歩踏み出したその時だった。地面に鋭い爪痕が刻まれているのが見えた。体が一瞬こわばり、すぐに下山する。

しかし、平地に着いてから私はあることを思った。この足跡をのこした獣は、今感染症が流行しているのを知らず、のびのびと生活しているのだろう。そう考えると、怖さよりもうらやましさが勝って、なんだかもう一度足跡を見たくなった。私はその場所まで戻って、写真を撮った。

9月29日

今日は編集部先輩と本学の近くから登り、元坂の水道橋を目指す。まず私たちを待っていたのは、先が見えない登り道だった。左手には野原が広がっていて、そのもつと奥にはまちが見える。右手には木が茂っていて、午後の木漏れ日を地面にきらきらと映している。その景色を見ながら、私たちは息を切らして登った。本当はこの景色に合うような涼

しい顔で登りたかったが、あまりにも傾斜が急だった。

頂上と思われるところに着いたあと、今度は下り道を進む。ススキがさやさやと揺れている。途中、「友愛の森」という休憩所があった。近くの地面には栗のイガがたくさん落ちていた。しかし、イガのなかには栗が入っていない。近くの茂みを見ると、不自然なトンネルがあるのが目に入った。このトンネルを使って



クマが栗を持って行ったのではない
か。そう想像してしまい、こわくなっ
て後ずさりした。

やがてT字路に行き当たった。右
を向くと、時代を感じさせる水道橋
がそこにあつた。奥行きがしつかり
とあつて、ずつしりとした重み感
を感じる。橋のしたの空間に風が集ま
ってきて、額にじんだ汗を爽やかに
乾かしてくれた。

10月16日

サクラの木はもうすでに落葉して
いて、歩くたびにパリパリと音がす
る。地面には、落ち葉以外にも、マ
ツボックリや茶色いドングリが転
がっている。モミジは先の部分が薄



シカの足跡だった(2021年8月31日)

い赤に染まつてきていた。

登りはだんだんと傾斜がきつ
なつていき、最後の方は足にしつ
かりと力を入れないとすべつてしま
うのだつた。足元に意識を集中させ
ていると、すぐ横にシカがすべつた
跡が何カ所も残っているのが目に
入つた。ほほえましくて、つい気が
緩みそうになる。ついに都留アルプ
ス最高峰の713メートル地点にた
どり着いた。しかし私は複雑な心境
があつた。最高峰までのぼつた達成感
があつた。体力的にはもつと
登つたつもりだつたからだ。
下りは登りに比べてなだらかで、
周りをよく見る余裕があつた。森は
とても美しかった。しかし「美しい」



元坂の水道橋(2021年9月29日)

という言葉だけで片付けてしまふの
はもつたいなかつた。目の前に広が
る景色をもう一度じっくり見てみる。
森は見渡すかぎり果てしなく続いて
いるようだ。緑と茶色の二色が視界
を占領している。空にまつすぐ伸び
ている木は力強く、傾いている木は
しとやかだ。横たわっている木には
空虚さと同時に貫緑がある。いたる
ところに生えるコケには無邪気さを
感じ、木漏れ日と影は森の表情をこ
ろころと変えている。そしてそれら
森のすべてが合わさつてうまれる生
命力。私はそれをひしひしと感じた。



3ヶ月間歩いてみて、森には思っ
ていたほどの大きな変化はなかつ
た。しかし、夏から秋にかけて細や
かに変化するようすを見ることがで
きた。私はこのハイキングで、観察
する力が少し養われたように感じ
る。小さな変化への気づきを積み重
ねることこそ、心を豊かにしてくれ
るのではないか。そう森は気づかせ
てくれた。

長岡芽依(国文学科1年)

|| 文・写真



優しい木漏れ日がふりそそぐ(2021年10月16日)

かげ

はもたらす

セミが声をそろえて鳴き、太陽がじりじりと照りつける夏の日、影は私たちの救いとなる。これまでの私にとって、影は「涼ませてくれるもの」でしかなかった。

広がる想像力

大学生活に慣れてきたころ、道ばたの植物の影に魅了された。それは植物を細かくあらわしているように見えるが、実物とは違って弾力や感触のイメージが湧かない。もちろん、さわることもできない。すがたをそっくりそのまま写し出しているのに、影というだけで味気なさをおぼえる。小学校で「かげおくり」をして以来、じっくり見ることはほとんどなかった。この気づきをきっかけに影を意識し

てみようと思った。

7月中旬、雲一つない青空が広がる日のこと。私は影のことを考え、行き先も決めずにひたすら歩いた。最初に見つけたのは道路標識の影だ。「あ、おでんだ」。大根とちくわだるうか。季節外れではあるが、一度そう感じたらおでんにしか見えない。この暑さもあいまつて冬がどんどん恋しくなる。

ふたたび歩きはじめると、道路に沿って並ぶ木々の影が、楽しそうにおどる人びとのように見えてきた。愉快な音楽が流れてきそうに気分がはずむ。ふだん見ていたはずの影が、思いがけず自分を明るく気分にしてくれた。

今度は足元も見てみようとしやがみこむ。目に入ってきたのはアリだ。アリの後ろにつづく影は、アリの身体よりもずっと大きい。まるで、自分を大きく見せようとしているようだ。せかせかと進んでいくアリに寸分の狂いもなくついていく影を、目で追った。当然のことだが、見事だと感心してしまう。毎日通る道がこんなにワクワクするものだと知らなかった。「暑いなあ」とだけ思っただけと歩いていた今までの自分は、もったいないことをしていたようだ。



おでんに見える影。こんなにやくの三角形がないのが物足りない(2021年10月4日)



イカに見える影。ゲームのキャラクターのようにも見えてきた(2021年8月1日)



ひと味ちがう影

8月に入ってから、影を探しに出かけた。二つの丸できてきている標識の影がなぜかイカのような形になっている。丸かったはずの標識は、傘のようにしぼんでしまった。その後、夕方の時間帯をねらって見に行くと、何事もなかったかのように二つの丸い影が、縦に並んで写っている。同じものをあらわしているはずなのに、時間によってこんなにも異なっただがたを見せてくれるのだ。影の自由さを感じた。

いつもは意識しない道ばたも眺めてみる。よく見ると、葉の影がとても細かい。影という、大きくて真つ黒なイメージだが、これはひと味違う。細い葉の一本いっぽんが丁寧にあらわされていて、葉が風になびくと影もなめらかに揺れる。影がここまで繊細にものをあらわせるとは思わなかった。周りには、ふわふわしていて平面にうつし出すのが難しそう、タンポポの綿毛やねこじやらしの影もあった。意外にもくつきりとしている。やわらかなようすは、影の色の濃淡であらわされていた。影はどんなものでもあらわせる。

単色で平たんだからと言って油断してはいけない。

* * *

雨の日の翌日、ぬれたアスファルトにうつし出される影や、夜道の街灯の冷たい光によつて生み出される影。つくりだす多くの要素の一つが変わるだけでも見えかたは変わる。そして自分の気分までもが、影の印象を変えることがある。お腹が空いていればおもしろい影になるように、同じ人間でも気分によつて影をどう見るかは変わる。

影には無限の可能性がある。影に意識を向ければ、何度見た景色でさえ新鮮に感じられる。影のおかげで、何も無いと思っていた帰り道も歩くのが楽しくなった。そして何より、自分のまわりには小さな発見がたくさんあるのだと知る。今ままであれば見過ごしていたであろう、日常のなかのささいな風景や変化が見えるようになった。影は、日々を少しだけ、おもしろく豊かにしてくれた。

宮崎明音(比較文化学科1年) 文・写真

チョウやガの仲間たち

フィールド暦



アゲハチョウ

(2021年9月21日、キャンパス)

ヒガンバナにアゲハチョウが蜜を吸いに訪れました。キャンパスにあるカラタチやサンショウに卵を産みつけます。

夏から秋にかけて、生きものたちの活動が盛んになってきます。今号では、2021年7月から9月に撮影された色鮮やかなチョウやガを紹介します。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



スミナガシの幼虫

(2021年10月16日、キャンパス)

編集室の前にあるアワブキにスミナガシの幼虫がいました。スミナガシはその名の通り淡いグラデーションが美しい蝶です。



オオミズアオ

(2021年7月30日、キャンパス)

幼虫の頃はカエデやサクラを食べて生活をします。成虫になると口がなくなるため、一週間しか生きることができません。



ジャコウアゲハ

(2021年9月10日、キャンパス)

ブッドレアに蜜を吸いにやってきました。ゆっくりと飛び、体には強いにおいがあります。幼虫はウマノスズクサなどを食べて育ちます。



ゴマダラチョウ

(2021年8月4日、キャンパス)

羽化したばかりのゴマダラチョウに出会いました。幼虫はエノキの葉を食べて育ちます。北海道から九州に生息し、体長は40mmほどです。



シータテハ

(2021年7月18日、キャンパス)

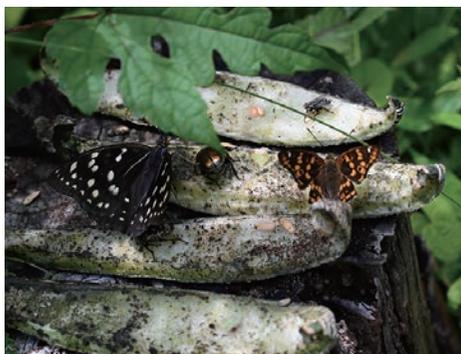
羽の裏に「C」の模様があることから「シータテハ」と呼ばれています。「L」の模様があるものは「エルタテハ」と言います。



ホウジャクの仲間

(2021年9月6日、キャンパス)

ホウジャクの仲間がブuddleアの蜜を吸いにやってきました。ハチドリのようにホバリングしながら長い舌で蜜を吸います。昼間、花に飛んで来ます。



オオムラサキ(左)とコムラサキ(右)

(2021年7月13日、キャンパス)

食べ終わったメロンを餌台に置いてみました。さっそくオオムラサキとコムラサキ、カナブンなどがやってきました。



スズメガの仲間

(2021年9月10日、キャンパス駐車場)

前ばねが細長いのが特徴です。非常に早く飛びます。体は50mmほどありがちりしています。とても長い口吻こうぶんがあります。

旅するチョウ「アサギマダラ」



(2021年9月22日、キャンパス)

羽の模様が鮮やかで、長距離を移動するチョウとして有名です。最長の移動距離は約2500kmです。そのため、アサギマダラの羽が、破けてしまうこともあります。和名にある「浅葱(あさぎ)」とは、青緑色の古い名称とされています。



思い描くままに

「作品には、その人の性格がそのまま出ます」と安本千昭さん(47)はおっしゃる。安本善博さん(50)と奥さまの千昭さんが2013年に都留市西桂でガラス工房を開いてから今年で8年目になる。余計な装飾をほとんど施さず、上品でしなやかに作り上げられた「あしたば硝子工房」の作品たち。その一つひとつとお二人の性格を重ねながらお話をうかがった。



作業の途中、時折パリンとガラスが弾ける音がした(2021年7月30日)

建築からモノ作りの道へ

工房はトタン屋根の平屋で、入り口付近にはお皿やコップ、小さな置物や花瓶などお二人の作品が展示されていた。奥は作業場になっており、ガラスを加工するための窯が二つ並んでいる。工房内ではおともに、商品の制作と体験活動をおこなっている。善博さんはガラス作りに26年間携わってきた。20年前は建築のお仕事をされていたそう。「図面を書くよりも、ものづくりをするほうが性に合っていたんで」と、善博さんは転職の理由をはっきりと口にした。デスクワークよりも体を動かす仕事がしたいという一心で転職を決意したという。

「美大にかよっていたこともあって、周りの人たちのものづくりを見て、作り手のほうについて思ったみたい」。そう言葉を添える千昭さんも専門の学校にかよい、創作の道に進んだ。お二人の出会いも「ものづくり」がきっかけだったと照れながら話してくださった。今はパソコンを使って作業できる建築の仕事も、昔は紙と鉛筆を使った細かい作業が必要だったという。「パソコンを使うのは嫌いじゃ

ないから、もしあのころ機械が使える時代
だったらまた今とは変わっていたかもしれな
い」と善博さんは過去を振り返る。「でもやっ
ぱりタイミングだね」。その横顔は自らの選
択を後悔していないように見えた。

割れないガラス

「好きな素材を好きなように表現して、そ
れをまわりの人が共感してくれたときはやっ
ぱり嬉しいですね」と千昭さんはおつしや
る。その横で、「飽きたらたぶん、やめちゃ
うと思うんだけどね。ふつうは固いガラス
が、高い温度で熱せられてかたちを変えるそ
のギャップがおもしろくて、僕はこの仕事を
続けています」と語る善博さんは、少年のよ
うに無邪気な表情を見せた。

そんな善博さんがとくに力を入れた作品
だという「泡の一輪挿し」と名付けられた花
瓶を見せていただく。ガラスの中の泡は重曹
を使って作成し、金平糖くらいの小さなガラ
スを溶かして色味を調整していく。水色を含
んだ球体のガラスは置く場所によって光の差
し込み具合がちがう。そのため、太陽の光で
ガラスの中の気泡がキラキラと輝き、生きも

のように見える。花は自然から切り離され
ているはずなのに、花瓶に入れることで花た
ちに生命力が戻ったようで不思議に感じた。
ガラスが、やわらかいスライムやひんやりと
した液体のように見えたのは初めてだった。

「発想というより経験をおして作品を作
ります」。ガラスは溶かして固めるほかに、
機械を使って削ったり磨いたりすることがで
きる。そのため、応用をきかせアクセサリー
や干支を表した小さな置物など、さまざま
な作品に挑戦しているという。なかでも千昭さ
んの作る蛙や牛といった可愛らしく象^{かたど}られた
作品は、ガラスの世界と私を少し近づけてく
れた。千昭さんは動物の他にも富士山を象徴
した作品を手がけることもあり、河口湖駅や
富士山駅、富士山の5合目などに作品をおか
せてもらって販売しているという。

手作りの窯で

私はこの日、千昭さんの手をお貸りして風
鈴を制作した。1140度の熱をもつ窯の前
に立つと、一気に顔の表面が熱くなり思わず
固く目をつむってしまふ。専門家のかたと話
し合いを重ね千昭さんが設計したという窯

は、ファイバーキャストと呼ばれる耐熱材か
ら作られている。降り積もったばかりの雪の
ように真っ白な耐熱材が、優しいオレンジ色
の火に照らされる。そのようすに、窯の中が
高熱だということを忘れ、思わず見とれてし
まふ。しばらく窯の前で作業をしていると、
体温も徐々に上がっていくのを感じた。専用
の棒の先端に付けられたガラスの塊は窯のな
かに入れると、徐々に溶け始めかたちを変え
ていく。下に垂れ流された液体状のガラスを、
千昭さんは器用に棒を動かしながら整えてい
く。ガラスは普通、衝撃を加えると割れてし
まうものだ。しかし目の前にある釜のなかで
水あめのように変形する液体は、私の想像す
るガラスの性質とはほど遠いようだった。

* * *

出来上がった風鈴を家に持ち帰り眺める。
工房に置いてあった見本よりも少し大きくて
ふっくらしている気がした。「ちよつと欲張っ
ちゃったかな。見事に自分の性格がでたな」。
そう思いながら秋の風に揺れる風鈴の音色を
聞いた。



センサーカメラが 写したどうぶつたち



本学フィールド・ミュージアムでは、キャンパス内の森にセンサーカメラ（赤外線を感知すると自動的にシャッターが切れるカメラ）を設置して動物の調査をしています。今号では、8月と10月に撮影されたタヌキとアナグマを紹介します。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



アナグマ

近年、キャンパスで出会う機会が増えました。おもにミミズなどの土壌動物を食べます。個体数が減っている地域もあり、神奈川県の三浦半島では絶滅したと考えられています。



2021年8月11日



2021年10月8日



タヌキ

木の実や昆虫などを食べる雑食です。夜行性で、キャンパスの側溝をひんぱんに移動しているようです。これから寒くなってくると皮下脂肪をたくわえ、ずんぐりとした体型になります。



2021年8月11日



2021年10月6日

ムササビ 観察日記

- 7年目 -

2013年、本学のキャンパスにある森「ムササビの森」に2つの巣箱を取り付けました。その様子は本学ホームページのムササビライブカメラ (<http://www.tsuru.ac.jp>) でご覧になれます。2021年7月には、ムササビの赤ちゃんが誕生し、『そら』、『いつき』と名付けられました。今号では、2頭が巣立つまでのようすをお伝えします。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

8月4日 おなかが見えました



誕生して約10日。赤ちゃんのおなかと手足、ひま飛膜をみることができました。

8月10日 元気いっぱい



お母さんのおなかの上にいることが多い2頭の赤ちゃんですが、この日は巣材の上にあります。

8月25日 成長期?



誕生して約1ヶ月。ここ最近で体長や尾がぐんぐん大きくなりました。

8月26日 親子でばんざい



親子そろって両手をあげてあおむけに寝ていません。このようにして寝ることが多くなりました。

9月13日 興味しんしん



外が気になるのか両手を巣箱の壁にかけ立ちあがるようになっています。顔ははっきりとみえました。

9月20日 そろそろ巣立ち



誕生して約2ヶ月。外に出かけるお母さんのうしろをついていきます。



本誌 108 号で、^{さいがんじ}西願寺のモミジの赤い芽を観察した。芽吹きから開花まで見届けてひと段落したころ、ご住職の^{おおいのぶひこ}大江信彦さん (79) にモミジについて話をうかがった。そこで西願寺のモミジが「七変化もみじ」と呼ばれてきたことを知ることができた。

上：葉が黄色に近い。日に透かせば黄金色に見えただろうか(2021年4月1日)

下：根元が細く、3分の2ほどは桜で覆われている(2021年7月18日)



繊細な木



6月26日に西願寺を訪ねた。急な訪問のお願いだったが、住職である信彦さんと奥さまの啓子さん(73)はあたたかく迎えてくださった。前号のモミジの観察記録をお見せすると、ご夫婦は西願寺とモミジの話を教えてくださった。

西願寺のモミジは春先に赤い芽をつける。そこから黄金色の若葉をつけ、夏には緑へ。

秋から冬にかけて紅葉し、茶色くなる。そのようすから「七変化もみじ」と呼ばれているという。啓さんが教えてくださる見ごろは秋ではなく春先だ。「日の光を透かすと黄金色に見えて綺麗なの」。そう微笑まれる。4月といえば、私が西願寺のモミジを熱心に観察していたころだ。たしかに黄緑より、さらに明るい色の葉があった。芽吹きに気が急いで、青空を背景に日を透かした葉をきちんと見ておかなかったことが悔やまれる。

名前の由来を聞いて、「変化の大きい品種なんだ」と驚く。しかし「七変化もみじ」は正しい品種名ではなく俗称だ。「記者のかたつて徹底的に調べられるでしょう。以前、取材に來られたときに、七変化もみじという品種名はないことを調べてくれたんです」と、啓さんが教えてくださる。残念ながら、そこで正しい品種名が分かったわけではない。「それでも七変化もみじと言えばこのへんの人たちは、上谷かみやの西願寺のモミジと分かつ

てしまうんです」。そう言つて笑う信彦さんは誇らしげだ。「専門家ではないから先代、先々代から語り聞いたことしか分らないけど」。そう断りながらも、信彦さんは知っていることをいねいに話してくださった。

お話によると、七変化もみじは突然変異のモミジらしい。それは葉の色の変化に加えて、今の七変化もみじの種から芽吹いても同じように育たないからだ。信彦さんは「花も葉も小さいでしょう。植木屋さんに見てもらったけど上品だと」。そう褒めてもらったときのことを思い出して笑う顔は嬉しそうだ。けれども良いことばかりではない。七変化もみじはとても繊細だ。「枝に粘りがなければならなくつてこんなに太い枝が折れてしまったんです」。信彦さんは両手で丸を作つて枝の太さを教えてくださる。それは直径10センチくらいに見えた。

ほかのモミジと違つていたり、綺麗だったりするのは見る人にとつて良いことだ。けれど木にとつても同じように良いこととは限らないのかもしれない。樹齢400年になつても、隣に並んだ枝垂桜よりずいぶんと小さくて細いモミジのすがたが思い出された。

つなぐための接木



七変化もみじの来歴は明らかではない。啓子さんが教えてくださった樹齢は西願寺の歴史とともに教わつたことという。教わつた話によると、西願寺は今から800年前の鎌倉時代におこされた。場所は上谷ではなく、今の都留自動車学校の近く、採石場のあたりだ。そのそばに菅野川^{すがのがわ}があり、水の勢いで川の流れる場所が変わることから「暴れ川」と呼ばれていたらしい。そして400年前の洪水に



太子堂を挟んで2本のモミジが立っている(※1)

よつて建物ごと流されてしまい、今の場所へ移された。その移転以来、モミジもここにあるというように聞かされているそうだ。そして移転当初、モミジは2本あつたとのことだ。今の、1本だけの木を思い浮かべて首を傾げていると、もう1本は枯れてしまつたのだと啓子さんが教えてくださる。枯れたのは啓子さんが西願寺に來られる以前のことで、もう1本は本堂から見えて、今のモミジの向かつて右側、太子堂を挟んで立つていた。枯れてしまつたモミジは周辺のかたが珍しがり、取り木(※2)したことをきつかけとして、弱つてしまつたのではないかということだつた。2本並んだモミジは啓子さんも写真で見ることがない。お寺の歴史や七変化もみじについての知識は、信彦さんの父の妹で、養母だつた綾子さんから教わつたことだ。信彦さんは叔母である綾子さんの養子になることで、長い歴史のある西願寺の任職を継ぐことにしたのだという。移転時にされたと思われる接木の経緯はよくわかつていない。それでもモミジとお寺の歴史をうかがうと、木が今こうして残つていることがとても貴重なことだとわかる。

※1『奥隆行写真コレクション』都留文科大学地域交流研究センターフィールド・ミュージアム部門 2012年

※2接木のために木から枝をとること

そうしてなんとか残った七変化もみじだが、現在は弱ってしまっている。大きくなった枝垂桜に覆われて光合成が十分にできなかったり、幹から枝の中までアリが食べてしまったりしたためだ。私は今年はじめて七変化もみじを見たため気がつかなかったが、今年はその数がとても少なかったという。そう言われて思い出すと、本学周辺のモミジは五月ごろびつしりと種をつけていた。いつぼう七変化もみじは何度も通うことで、ようやく一



アリに食べられ、枝のなかが空洞になっている (2021年7月24日)

つ見つけたのだ。弱っていたのが理由だとは考えもしなかった。そこで延命のために植木屋さんへ頼み込み、なんとか枝を落としてもらった。しかしもう良くなることはないだろうと言われたそうだ。「あと2、3年つてことはないと思うけど、もう寿命が近いんだらうね。種から育つものでもないし」。信彦さんがそう

おっしゃるのは、今の七変化もみじが枯れたあとのことだ。代々、大切にしてきたモミジをここで絶やしたくないという考えられてきた。しかし繊細なため、なかなかうまく育たない。種から育てられたとしても普通のモミジに育つだけ。接木もそうして今育っているものをご存知ないのに加え、取木のために枯れてしまったモミジのことがあつてできなかつたのだそう。そういう八方塞がりな事情があり、七変化もみじとよく似た木を植木屋さんのところで見つけるときは何度も通ってなんとか売ってもらったそうだ。その木は西願寺の西側にある。けれど20年経つてもな



かなか大きくならない。七変化もみじに似ていることから繊細な木のだろう。

こうしてモミジを存続させるために努力するご夫婦の話からは、長い歴史のあるお寺と七変化もみじを受け継いだとおりに次へ渡したいという、強い責任感と思いが感じられる。接木すればいいと単純に思うかもしれないが、うまくいく保証はない。むしろ弱く繊細な木で、元の木も接ぐほうも枯れてしまう可能性が高い。現状とこれまでの歴史を目の当たりにすると、つなぐための接木とはいえ、それを怖いと言われた啓子さんの気持ちが、切実に身に迫って感じられた。

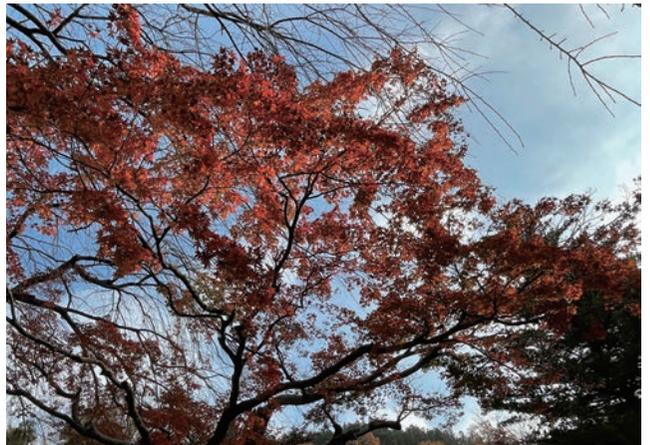
▷植木屋さんから売ってもらったモミジ。高さは4メートルもない (2021年7月24日)

西願寺と「七変化もみじ」



信彦さんは枝垂桜よりも七変化もみじが気に入っている。そのため枝垂桜の枝がモミジを覆ったとき「桜のほうを切つてしまえと言うんだけど、みんながダメだダメだつて」と苦笑いを浮かべる。枝垂桜のお椀のように丸く覆いかぶさるすがたが綺麗なため切らせてくれないのだとか。枝垂桜を見にくる人は多いようで、「モミジやその花のことは知らない人も多い」と語る信彦さんからは、モミジに向ける強い熱意がうかがわれる。

七変化もみじは、接木をめぐつて多くの出来事と直面してきた。現実には、それは七変化もみじを枯らすことにつながったかもしれない。しかし、それは多くの人に親しまれ、愛されてきたということでもある。何よりご夫婦がモミジを大切に、少しでも木が長生きできるように、さまざまな試行錯誤をされてきたことと接木を切り離して語ることはできない。七変化もみじが周辺の人によく知られていると話す信彦さんの言葉は、多くの人々がモミジに関心をもっていたことを教えてくれる。そしてこの話を語るといふことが、



朱色に紅葉した七変化もみじ (2021年11月21日)

七変化もみじとそれを繋いできた西願寺に対する信彦さんの誇りを表しているように思えた。枝垂桜についても信彦さんは話してくださる。そこで「桜は50年くらいで苗木から今の大きさになったけれど、もし七変化もみじが根づいたとしても、私の代で大きくなることはないでしょう」と言われた。表情に変化はないように見えた。けれどこの言葉から、やがて枯れてしまう七変化もみじに対する信彦さんの確かな切なさを感じた。

残したいもの



今まで私は七変化もみじを「西願寺のモミジ」と呼んできた。そこには西願寺に生えているモミジというだけの意味しかない。それがご夫妻からお話をうかがうことで「七変化もみじ」へ変わっていった。「七変化もみじ」は、はたから見ればいち地方の、お寺周辺で使われている俗称に過ぎないかもしれない。けれど「西願寺のモミジ」ではなく、「七変化もみじ」を使う人たちのあいだでは、きつこの言葉で共有するイメージや感覚がある。たとえば、モミジの1年を通した変化や、その変化を愛する気持ちがあるだろう。そして通称として馴染むだけの時間がたつうちに、大切にする人たちがどうしの繋がりがも育まれていったかもしれない。そういう、モミジのすがたと思ひ、歴史、繋がりとにかくがえのないものが、この通称にはあるように思えてならない。そして多くの人たちに愛されつづけることで、「七変化もみじ」はいつのまにか通称から愛称として、地域になじんでいったのではないだろうか。

お話を聞きおえ、帰りがわにモミジを見る。

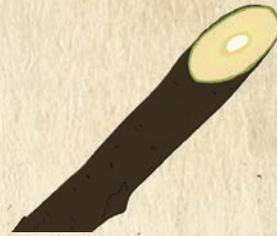
接木ってなに？

接木とは、土台となる木に別の木を繋げることだ。例えば、病気や虫に弱い品種に強い品種を接いで強くする。ソメイヨシノのように、個体を増やすためなど、さまざまな目的で行われている。そして接木は形成層と呼ばれる、植物の体内にある新しい細胞を作り出しているところを利用して行う。土台となる台木と、穂木の形成層を合わせることがポイントだ。

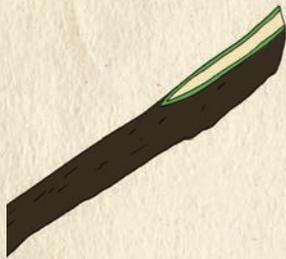


形成層
…維管束にある。樹皮側に師管（養分を通す管）、木質部側に、導管（水を通す管）がある

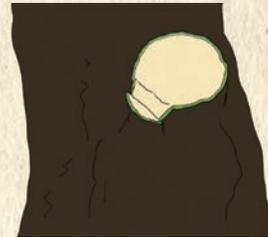
① 穂木を 40 度程度の角度で切る



② 形成層が見えるように皮を削ぐ



③ 接ぐところで台木を切り、形成層が見えるように樹皮を削ぐ



④ 台木と穂木の形成層が合うように差し込む



形成層の一部だけでも合っていれば接ぐことができる

⑤ 一体するまで乾かないように覆って密封する



つながった形成層で細胞が作られて一体化する

以前と変わらず根本が細らみ、枝垂桜よりかなり小ぶりで、葉は小さい。けれどもお話をうかがった私のなかで、それらの特徴は、ただの特徴ではなく木の歴史をあらわすものになった。

そして以前よりモミジの葉は青く、私が春先に好んで観察していた枝はなくなっている。季節による変化と残したい人の思いがモミジを少しずつ変えていく。それでもいつかモミジは消えてしまう。七変化もみじがこの場所から消えてしまえば、モミジについて尋ねる人はいずれいなくなるだろう。西願寺の代々の住職が繋いで、今の住職である信彦さんご夫婦が大切に見守ってきた事実や、多くの人からの愛情。おのおのの思いを一身に受けてきたモミジがあつたこと。これらの事実はいつか失われ、忘れられていくかもしれない。ご夫婦から話をうかがい、私も変わったのだろう。「せめて伝えることで七変化もみじを残したい」。そう強く思った。

赤松優香（国文学専攻2年）|| 文・写真

電車に乗る楽しみ

今となつては

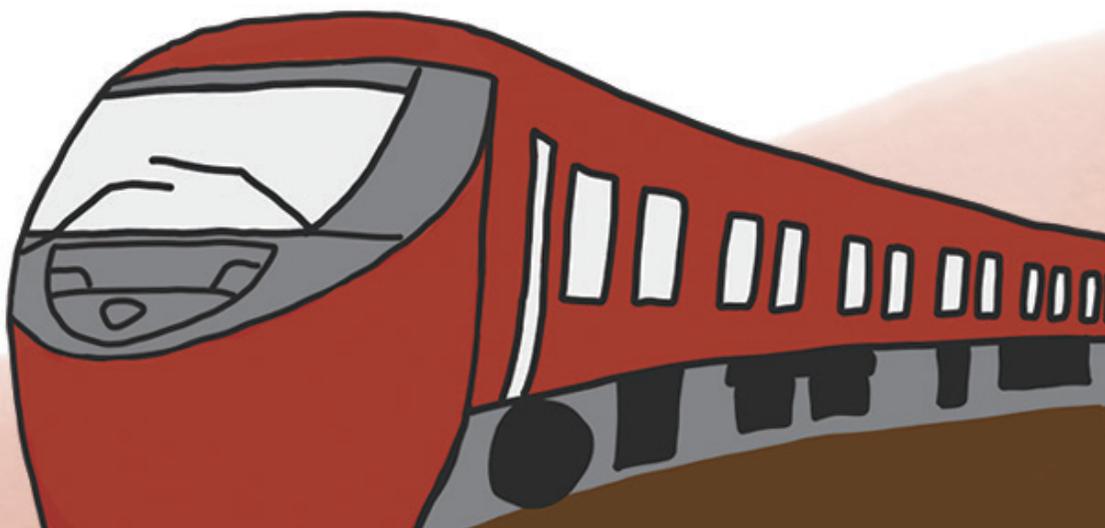
ある日、車を運転していると、踏切の前でちょうど遮断機がおりた。ブレーキを踏みつつ電車が通り過ぎるのを待つ。たくさんの人を乗せて、電車は勢いよく走っていった。その光景を見てふと、近ごろ電車に乗っていないことに気づく。大学に電車がかよつていたときは、毎日のように利用していた。早起きして、発車時間を気にしながら支度をする。ときにはギリギリになつて駅のホームまで全力で走ることもあつた。今は運転免許をとつたことで、生活のなかに電車での移動がめつきりなくなっている。

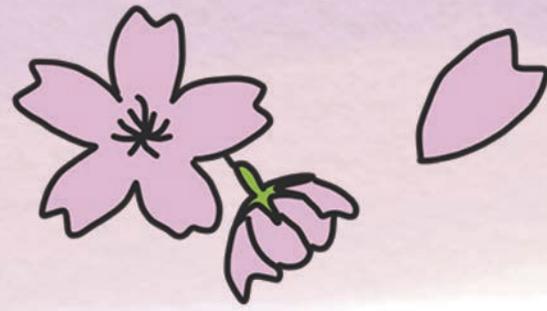
車を運転できたら、どんなに便利だろう。眠い目をこすりながら電車に乗り込むとき、いつも感じていたことだ。時間にとらわれなくていいし、人目を気にする必要もない。いろんな駅を経由することなく、目的地にすぐたどり着ける。車で大学に

かよつていた友人が心底うらやましかった。しかし免許を取つて運転にも慣れた今、電車にまた乗りたいと思うことがある。

電車に乗ると

電車では車窓からの景色を楽しめる。なかでも印象に残っているのは、富士急行線たの、さ田野倉駅の春の景色だ。駅のホームに停車すると、目の前には一面の黄色い菜の花と薄ピンク色の桜の木が現れる。駅舎の淡い紫色もあいまって、どこかの楽園にきたかと思うほど見とれてしまう。春という季節をぎゅつと詰め込んだような景色だ。電車内で座つてみると、車窓に切り取られて一つの絵画のようにも感じられる。通学中のお気に入りスポットだった。当たり前だが、車に乗っていると運転に集中しなければならず、まわりに目を向ける余裕があまりない。目的地に向かいつつ、さまざまな景色を楽しませてくれるなんて、電車は動く美術





館のようだ。

電車でのゆつくりとした移動時間が、心を落ち着けるひとときにもなっていた。学校で落ち込むことがあっても、電車に乗って悩むうちに寝てしまったり、小さな子どもたちのはしゃぐがたを見たりしていると、自然と心もやわらぐ。家に着くころには、まあいいか、とご飯をおいしく食べて気持ちよく眠りについてしまっていた。電車での通学時間は単に学校と家とを結ぶだけでなく、気持ちをリセットしてくれる私の大事なひとときだった。

さまざまなハプニングに出くわすのも、車より電車に乗っているときが多い。帰宅途中、落雷で電車が長いあいだ停電してしまい、家に帰れず友人と助け合って過ごしたこともあった。寝坊して授業になんとか間に合わせようと特急に乗ろうとしたこともある。そのときは間違えて別の特急の指定席をとってしまったことに気づき、車掌さんの前で一人涙

ぐんでパニックになってしまった。寒いなか待合室で電車を待っていたときには、見知らぬおぼあちゃんが飴をくれたこともあった。お腹をすかせていた私には、一粒の飴がどんなにうれしかったことか。大きなニュースになるような特別なことではないけれど、私のなかではどれも全部、大切な思い出だ。

* * *

電車に乗っていると、何もない一日なんてなかったなあ、と思う。美しい景色を見つけたり、誰かに出会って励まされたり、予期せぬできごとを経験したり。電車が私のちっぽけな一日一日を、楽しいものに変えてくれていた。またいつか、車ではなくあえて電車で移動する日をつくってみよう。ICカードを忘れずにもって、出発時刻をきちんと調べて、と久しぶりに電車に乗る準備を想像して笑みがこぼれた。

深沢有佳 文



都留の風景写真集

高木帆月(比較文化学科2年)・霜田香菜子(国際教育学科1年)=文・写真



アマガエルが苔に同化しているようです(2021年7月23日)
@ 都留市上谷



帰り道に買い物袋をかかえてシャッターを切りました(2021年7月29日)
@ 都留市田原



街灯に照らされ木の枝が星のようにみえます (2021年11月19日)
◎ 都留市田原



綿毛のついたタネを背負ってどこへいくのでしょうか (2021年9月29日)
◎ 都留市田原

編集後記

ひとり暮らしの夜

なにしてたっけ。疲れた日や眠い日は雑になっ
てしまいますが、1日を振り返り、日記を
書くようにしています。「3年日記」を書いている
のですが、2年目以降は昔の自分を思い返すと
いう小さな楽しみが増えました。飽き性な自分でも、
お気に入りの文房具屋さんで買った万年筆や、
自分好みの日記帳のおかげで続いています。

(柏倉和奏)

がまんして、暖房をつけずに過ごしています。夏、
実家から都留に戻り、部屋を掃除するついで
にストーブを組み立てました。冬の入り口の11月下
旬で、最低気温が氷点下2度なのにたまがています。
先手を打ったはずが、早くも後手に回されたよう
です。冬本番が思いやられます。都留の寒さよ、どう
か本気を出さないでください。(谷朱理)

れいとうこのアイスをこたつで食べるのが、
金曜日の夜の楽しみです。食べるのはカッ
プのアイスで、とにかく早く食べたくて、必死に
木のスプーンで削ります。そしてパクッとひと口。
こたつであつたまった体に、アイスが溶けていく
のがわかります。今週もなんとか乗り越えたなあ。
頑張った後にこたつでアイスを食べると、幸せな
気持ちになります。(霜田香菜子)

ぼんやりとこたつで過ごしています。好きなこた
つでの過ごしかたは2つあって、1つ目は、温
かい飲みものと冷たいものを食べることです。おす
すめの組み合わせは、温かいカフェオレと冷蔵庫で
冷やしたいちごです。2つ目はアニメを見ることで、
最近「ルパン三世」をよくみています。大胆不敵
なルパンの行動にいつもハラハラさせられています。

(長岡芽依)

しずかな夜にはなかなか慣れません。1番の
問題は、「今日はこんなことがあった」と話
す相手がいないことです。うれしかった。悔しかつ
た。そういう感情が宙ぶらりんになって、消化し
きれない気がします。話し相手欲しさに花屋さん
でサボテンを買ってみましたが、相づちがないと
会話のラリーは続かず、話しかけたのは最初の2
日間だけでした。(宮崎明音)



都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 109 Dec.

FIELD-NOTE (フィールド・ノート) 109号
発行日：2021年12月24日
発行部数：800部

発行人
北垣憲仁

統括編集者
西教生

編集長
深沢有佳 (31.46.54-55)
渡邊唯 (2-3.15-17)

副編集長
阿部くるみ (12-14)
高橋杏佳 (18-20.30)

編集

赤松優香 (48-53.58-59)
風間悠花 (42-43.44-45)
辻口いづみ (4-5.24-26)
佐藤優美 (1.6-3.60)
高木帆月 (9-11.56-57)
林舞子 (27-29.47)
丸谷美寧 (21-23.58-59)
柏倉和奏 (2-3.32-33.58)
霜田香菜子 (34-35.56-57.58)
谷朱理 (36-37.42-43.58)
長岡芽依 (38-39.58-59)
宮崎明音 (1.40-41.58.60)

ロゴデザイン
工藤真純

発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原 3-8-1
都留文科大学地域交流研究センター
『フィールド・ノート』編集部
E-mail : field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにあります。気軽にいらしてください。

次回予告

【駅間】

東桂駅～大月駅



何もなき 畠をありく 星月夜

正岡子規

畑の手伝いに行くことがある。冬の畑は夏の盛りに比べると何も無い。街灯もない夜の畑はまっくらだ。

しかし、私はそんな畑が好きだ。ぽつかりと空に浮かぶ月が、チラチラと光る星が夜道を照らす。水路の水もそれらの光を拡散させる。

畑の管理人には「またこんな時間に来て」と怒られる。それでも私は暮れた畑をあぐる。

佐藤優美(国文学科2年) 〓 文・写真

